
セブンスドラゴン2020

しゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セブンスドラゴン2020

【Nコード】

N6840Y

【作者名】

しゅん

【あらすじ】

暇つぶしに最適な作品です！著者が原作ゲームを未プレイなので原作の展開を力子無視です、勘弁して下さい。次回更新12月下旬

電波塔からの最後の風景

殺人現場でも目撃してしまったのだろうか。

望遠鏡から、少し広いおでこを離し、彼女が俺に振り返った。

ここに来たときに比べその表情は暗く沈んでいる。

「どうしたの？」

聞くが彼女は答えない。

「大丈夫？」

聞くが彼女は答えない。

「何が見えたの？」

聞くと彼女は、小さな手で俺の腕を鷲づかみ、望遠鏡の前に立たせた。

俺は彼女に代わって、膝を少しだけ曲げ、望遠鏡を覗きこんだ。

真っ暗だった。

交代と同時に、時間切れになってしまったようだ。

展望台では双眼鏡を借りることもできたが、彼女の希望により、有料の望遠鏡で東京の風景を見ることにしたのだ。

俺も異論は無かった。

遙々東京に来たのだから、いちいち値段のことなど考えたくなかったからだ。

とは思ったものの、これ程時間が短いとは予想外だった。

双眼鏡の方がよかったかもしれない。

「ちょっと待って。」

彼女に言い、尻ポケットに入れた財布から百円玉を取り出した。

「何が見えたの？」

と硬貨を投入する前に、再度聞いてみるが、返答はなかった。

「...。」

彼女は何も言わず、早く見てと目で訴えてきた。

本当に、殺人現場でも目撃してしまったのだろうか。

だったら急がねばなるまい。

俺は望遠鏡の角度を変えことなく硬貨を入れた。

金属が流れる乾いた音と共に、視界が明るくなり、俺の目に巨大な翼が映った。

そして展望台が揺れ、俺達はその場に倒れるのだった。

ドラゴン襲来

東京が影に覆われた。

都市の上空が翼の生えた生命体・後に『ドラゴン』と正式に命名される・によって埋め尽くされた。

レーダーに補足されず、どこから出現したのかも不明。

警察、自衛隊、政治家は、突如出現したドラゴン達にどう対処すればいいかもわからず、一般人に紛れただ呆然と見ていたのだった。

超高層ビルが乱立する都市を見下ろし、一匹のドラゴンが飛んでいく。

ドラゴンは遙か前方にそびえ立ち、都心に巨大な影を落とす『塔』を目指していた。

滑空するように一直線に進み、やがて足が届く距離となると、翼を垂直に広げ減速し、塔の回りをグルグルと周り始めた。

飛び回りながら鋭い眼光を塔へと向け、鉄骨作りの表面を吟味する。

赤い鉄骨によって組み立てられたその塔は都内の超短波を送受信する設備を収容する電波塔であった。

東京タワー。

高さ三百三十三メートル。

たった一人の設計士によって図案は書かれ、建造は命綱一つに身をつつみ、狭い足場とビル風に翻弄されながら生身の男達に建てられたものだ。

建設期間は延長し、鉄骨部品が足りなくなった際には戦車を溶かして金属を集めたという。

先人達の偉業であり、技術の結晶ともいえる建造物である。

ドラゴンは後ろ足で鉄骨をつかみ、翼を下ろし重心を前に倒すことで塔へと着地した。

塔は垂直なので着地というよりしがみついているという方が正しいかもしれない。

翼を折りたたみ、しがみつくその姿は、東京タワーに巨大なコブができたようであった。

ドラゴンは空を見上げ、金色に輝く粉を吐き出し始めた。

ドラゴンの口からは噴水のように粉が吹き出し続け、太陽に照らされたそれらの粉は、東京タワーを中心に東京全域へと、円を描くよ

うに均等に広がっていくのだった。

旋回を続けていた他のドラゴン達は、翼で空気を叩き落とし、それは風として地上を駆け巡った。

歩道から立体高速、山手線の上から、東京メトロの地下鉄、さらに歌舞伎町の裏路地という裏路地の隅々まで風は吹いた。

するとどうだろう。

宙に漂っていた金の粉は風に乗り、地上へと流れたのだ。

それから数分後、粉塵は肥大しやがて開花し、毒々しい色の花を咲かせるのだった。

後にそれらの花々は、滅びを呼ぶ花『フロワロ』と名称される。

そして、フロワロの開花から、数時間後、ドラゴン達による本格的な『侵略』が開始され、国家を守るべく自衛隊による『防衛戦』が展開されるのであった。

No1 新宿駅にて(前書き)

ドラゴン襲来から数十年後、東京にて。

No1 新宿駅にて

東京都庁より中央通りを東に進むと新宿駅である。

新宿駅とは言うものの、駅の面積は私鉄の駅とは比較できないほど広く、そして複数の路線が走るため構造は複雑なのだ。

初めて新宿駅を訪れると、乗りたい路線がわからず迷子になってしまっただけである。

『新宿駅にて』とは言ったものの、一言で伝えてもわからないのが普通だ。

厳密な場所は、新宿駅のバスターミナルである。

曲がりくねったバス停留所と、それを囲むガードレール、そしてところかしこに見られる、新宿駅地下へと続く階段。

ドラゴンや怪物達による攻撃を受けたものの、ここにはバスターミナルらしい面影が残っていた。

そして数分前まで、このバスターミナルで銃声が鳴り響いていた。

突撃銃を構えた十人が扇状に広がり、一匹のドラゴンを取り囲んでいた。

『ビッグカメラ！』と看板のたつビルが背後にあるため、怪物には

逃げ場が無く、ジリジリと押し寄せる銃弾の壁に追い詰められていく。

客観的に見れば、陣形を組む戦闘員達が優勢であるようにも見えるが。

だがドラゴンには慌てる様子がない。

むしろ楽しみに尾をパタパタと振っている。

青い鱗に覆われた胴体と、首から尾までが蛇のように細長い。

背中に生えた翼が空を叩き、地面スレスレに浮かぶそのドラゴンは、『ケミカルドラゴ』と名称される小型のドラゴンであった。

どういふ習性があるのか不明だが、全てのケミカルドラゴは玉乗りをするように、巨大な椰子の実のような物体にしがみついているのが特徴だった。

ケミカルドラゴは長い首を持ち上げ、陣形を組む戦闘員達を見回した。

なりやまない銃声と閃光に怯むことなく、最新装備に身を包んだジエータ隊員一人一人を吟味しているかのようだ。

「陣形を緩めて距離を取れ！」

扇の中央に立っていた男が左右へと指示を出す。

ケミカルドラゴは長い首が持ち上げ、一度後ろに頭を引くた。

そして勢いとともに前へと突きだし、次の瞬間、緑色のへドロを吐き出した。

まるで人間がツバを遠くへ飛ばすような仕草である。

優勢に見えたはずが、ケミカルドラゴが吐き出した毒が陣形を崩し、隊員達の最新鋭の装備を破壊した。

「カバー！」

かけ声と共に、重傷者を囲む隊員達。

「大丈夫か！？」

「しっかりしろ！」

毒に侵された仲間を引きずり、それを背にした一人が再び突撃銃を構えた。

「作戦中止だ！お前達は撤収しろ！」

弾倉を入れ替え、引き金の横に備えられたレバーを下げると、迫ってくる敵の頭部に標準を合わせた。

「隊長！？」

傷の深さが違うだけで、負傷したのは全員同じだった。

皆が毒に侵され、治療が遅ければ危険な状態なのだ。

それでも誰かが敵を引き止めなければ、全員が命を落としてしまう。

「早く行け！」

ぐらつく足腰に濁を入れ、隊長と呼ばれた男は引き金を引いた。

パン、パン

と、長い銃身の先から一発ずつ弾が放たれる。

集団包囲よりも正確な狙いが、ドラゴンを怯ませた。

ビクンと首を持ち上げ、翼を広げ距離をとるように飛んでいく。

「行け！今しかない！！」

隊長は振り返らずに叫び、逃げるドラゴンを追おうとした。

ケミカルドラゴはしがみついていた木の実を捨て、大きく羽ばたいた。

ゴーグルに粉塵がぶつかるが、怯まずに威嚇射撃を続ける。

ドラゴンは宙をグネグネとうねるように飛び回ったかと思うと、次の瞬間、隊長へと一直線に飛んできたのだ。

よけようとするが間に合わず、ドラゴンの頭突きに身体が吹っ飛ばされる。

「…！」

鉄骨のガードレールへ衝突し、意識が一瞬とんだ。

だが顔を上げるとドラゴンが再び飛んできた。

休む間もなく、地面を転げそれを回避する。

起き上がると同時に、迎え撃とうとするが、突撃銃は今の一撃で手元を離れてしまっていた。

しまった、と思う間もなくドラゴンの牙が向かってくる。

慌ててベルトを触ると固い感触が。

そして手から伝わる形から、その正体が解った。

「グアアアアアアア！」

望みと共に、迫る真つ赤な口へそれを投げつけた。

強力な爆風と共に、金属の塊が弾け飛ぶ。

…はずだった。

「！」

地面に接した自分の視界に無骨な塊が転がった。

投げられた手榴弾は炸裂することなく、元の形のまま地面に落ちた。

「…。」

最後の抵抗も虚しく終わった。

「ハハ…ハ。」

自分の不甲斐なさに出てくるのは笑みだけであった。

まさか、安全ピンを抜き忘れるとは。

あきらめかけたその時、ブーン、と耳元で何かが飛んでいった。

そしてケミカルドラゴが悲鳴を上げた。

翼が止まり、ズズウンと粉塵を巻き上げ、地面に腹をついたのだ。

倒れたドラゴンは狂ったように頭を振り回していた。

その頭には二つの意味で見慣れない物が突き刺さっていた。

自分が指揮する部隊の人間が所有していないことと、武器としては時代遅れであるということ。

突き刺さっていたのは一本の短刀であった。

誰が投げたのか。

振り返る間もなく、地響きと共に自分の脇を走っていく一人の背中。

やはりそれは部下ではない。

服装も武装もまるで違い、まったく見慣れない姿であったからだ。

誰なのかはわからなかったが、その背丈と肉体から男であるということだけはわかった。

再び飛行しようと体位を立て直したケミカルドラゴ、そして走る背中是一直線にそれへと走る。

ドスン、ドスンとブーツの音を響かせ、ニメートル近い巨体が走る。

頭を下げ、肩を盾に風を切る巨体。

地面を蹴り、全ての加速と重量をドラゴンへと叩きつけた。

破壊鉄球のような一撃に、ドラゴンは悲鳴も上げずに吹っ飛び、新宿駅の地下道への壁を突き破った。

「嘘だろ…?」

体当たりをかました人物は素手ではなかったらうか。

陣形と銃撃をもってしても苦戦する相手を叩き落とすとは。

地下へ落ち、見えなくなった一人と一頭。

「大丈夫です。すぐに終わらせますから。」

声と共に金属の擦れる音が自分の横を通り過ぎた。

呆気にとられ、未だ倒れている自分の前に、刀を構えた女の背中が立ったのだ。

腰まで伸びた黒炭のように黒い髪と、白いシャツ。

そしてミニスカートにニーソックスというこの場には不似合いな姿であった。

まさか戦つつもりなのだろうか。

刀を構えている時点でそうだろうか…。

彼女は先程の巨体につき、粉塵の中へ飛び出していった。

No2 二人の精鋭

「新宿駅に出現したケミカルドラゴに対し負傷した模様、直ちにメデイカルルームへ移送せよ。」

「現場に残った人数は？」

「第三小隊の隊長、一名のようです。」

「了解。」

負傷者を担架に乗せ、衛生兵がビルへと入っていく。

このビルは東京都庁。

かつては東京都における様々な事務を執り行う役所であった。

現在はドラゴンから東京を奪還するための砦として機能していた。

砦を指揮するのは政府が有事に備えて組織した、『特務機関ムラクモ』である。

「ケミカルドラゴ討伐のため、付近にいたムラクモの戦闘員が増援に向かったらしい。」

手当てを受けていた隊員のもとに報せが届いた。

「人数は？」

「二人だ。」

思わず包帯の巻かれる腕を振り上げそうになった。

特務機関ムラクモの任務は東京の奪還であり、個人の救出ではない。それを受け持つ部署もあるが、あくまで首都奪還の作戦を基盤にムラクモは機能しているのだ。

生死の定まらない一人のジエータイのため、これ以上増員されることはないだろう。

「安心しろ。特務機関ムラクモでも精鋭の二人組だそうだ。」

肘を曲げ、柄を持った右手を耳の後ろで止める。

左手を刀身のミネに添え、肩の力と腰を落とす。

まるで弓を引くかのような姿勢だが、構えているのは刀である。

眼下には地下へと続く階段。

本来なら、地上に面した部分は屋根と壁に覆われているが、それは一分前に相棒が壊してしまった。

階段の奥は粉塵と暗闇に隠れ何も見えず、ただ二つの巨体が蠢いているのが直感できた。

ドラゴンの咆哮と、拳のぶつかる音、そしてむき出しのコンクリートの臭い。

相棒は戦い続けている。

「デスさん、大丈夫!？」

下へ向かって叫んでからしばらくすると、蠢いていた一人が地上へと顔を出した。

男は彼女よりも五段下の段に足をのせているが、彼女の視線は相棒のサングラスにピタリと合った。

「大丈夫だ、敵も弱らせた。止めは任せたぞ。」

ギターの低音が唸るような声で相棒は返事をし、彼女と同じ段差へ立ち拳を構えた。

不似合いな二人が並んだ。

三十センチは違うだろうか。

銃撃と、体当たりの一撃に加え、地下での拳による一騎打ちを受けたのだ。

ケミカルドラゴは弱っていた。

ここで刀による一撃は決定打となるだろう。

それを悟っているのか、ドラゴンはなかなか地上へと顔を出さない。

「…。」

「…。」

「グルル…。」

「…。」

「…！」

粉塵の中から飛び出したのは毒のヘドロだった。

「デスさん！」

刀を構えた彼女を庇うように、相棒はそれを背中を受け止めた。

「ちっ！」

「デスさん！」

「グルルルルルアア…！」

「俺にかまうな！止めをさせ！」

膝をつく相棒を尻目に、女は腰を少し引いた。

胸を張り、肩胛骨をくつつけるかのこどく刀を持った腕を引く。

咆哮と共に、ケミカルドラゴが粉塵からぬうつと顔だけを現した。

ゴツゴツした青い顔には、赤い液体が滝のように流れている。

ドラゴンの頭部には脇差しによる傷が残っていた。

女は上半身を半回転させ、右手で支えていた刀を傷痕へ向け貫いた。

両端が壁に包まれた階段では、断末魔の叫びが永遠と反響していたのだった。

No3 特務機関ムラクモ

午後二時だが、時刻を問わず東京は薄暗い雲に覆われていた。

ドラゴン襲来のその日から、一度も青空が東京上空に広がることはなかった。

陽の光もほとんど届かなくなり、本来少なかった東京中の自然は枯れ果てていた。

灰色の空とは対照的に、地上には極色の花が咲き乱れている。

その花、フロワロである。

コンクリートの地中に根を張りめぐらせ大繁殖をするフロワロ。

ドラゴンだけでなく、この外来種によっても東京は侵略されている。

そしてフロワロのまき散らす花粉が、人を毒に侵し、ドラゴンとは別の怪物を生み出す原因でもあった。

フロワロの撲滅と、ドラゴンの討伐。

この二つが首都東京を奪還するための最重要課題であった。

「ハ、イ、ヒーロー！超余裕でドラゴン討伐と救出任務をクリアしたって聞いたぞお！」

「余裕：じゃないよ。助けるつもりが助けられちゃったし。」

東京都庁のロビにて、二人の女がカスタマーサービスのようなカウンター越しに話していた。

ここは都庁内で暮らす一般市民からの依頼が申し込まれる部署であった。

ムラクモに属する戦闘員は各自の任意で、ここで依頼を受ける。

もっとも依頼を受けるのはあくまで、ムラクモからの指令が下りない時だけだが。

「助けたジエータと一緒にあのデカブツを運んだのか？」

「うん。デスさんは身体が大きいから、私一人じゃ運べなくて。」

女の一人はケミカルドラゴにとどめをさした黒髪の女である。

セーラーシャツとミニスカートにニーソックス、そしてベルトには脇差と日本刀を備えられている。

列記としたムラクモの戦闘員であり、コードネームは『サムライ』

であった。

対する人物はこの部署を管理する、『チエロン』という名の銀髪の女であった。

「あのデカブツでも治療が必要とは意外だよな……。」

「そんなこと言わないでよ。デスさんは私を守ってくれたんだよ。」

「だってヒーローの相棒、シュワルツネッガー扮するターミネーターとそっくりだよ？おまけにいつもサングラスだし。」

「……それは私も時々思うけど。」

等と二人が話していると、遠くからブーツの音が響いてきた。

見ると二メートル近い巨体の男が廊下の真ん中を悠々と歩いている。

噂をされていたご本人、「デスさん」である。

ここでターミネーターのBGMを流せば、映画のワンシーンとそっくり重なるだろう。

廊下をすれ違う一般市民全員が彼へと振り返っているほどだ。

サムライが「デスさん」と呼ぶが、その男の本来のコードネームは『デストロイヤー』である。

ケミカルドラゴとの戦闘で見た通り、素手で怪物と戦う、近接戦闘のエキスパートであった。

「おおお。噂をすれば……。もう治療が済んだのか？」

「デスさん。身体はもう大丈夫……。？」

何の噂をしていたのか気になったデストロイヤーだったが、「大丈夫だ。」と相棒への返事を優先するのだった。

「ごめんね私が油断しちゃったから。」

「命があっただ、次から気をつければいい。」

「そう……。だけど。」

俯くサムライを前に、デストロイヤーは責めることはなく、ただ黙って彼女の頭頂部を見下ろしていた。

そして並ぶ二人を前に、改めてその身長さに息をのむチエロンであった。

「いいコンビだな。まるで兄妹みたいだ。」

「俺が弟で、サムライが姉貴か？」

「バカか、逆だろ。」

「……。」

チエロンからの鋭い言葉がデストロイヤーに突き刺さり、彼は黙りこんでしまった。

「デ、デスさん……。」

「……。」

「ひょっとしてスネてるのか？」

「チエロンさん！デスさんグラスハートなんだから……！」

「う、嘘！何でも知っているこの私でも、それは知らなかった。と
いうかつまんないボケかますからいけねえんだろ？」

「デスさんはあれで真剣なの！」

墓石のように静かになったデストロイヤー。

こうなってしまうては、しばらく戻らないだろう。

「と、ところでアンタ達、時間はあるか？」

傷ついたデストロイヤーの心を取り戻すべく、チエロンが真面目な話を始めた。

「早急の依頼が届いている。アンタ達当てじゃないが、時間があるなら引き受けてくれないか。」

「どんな依頼なの？」

「依頼者を『池袋』まで連れて行ってほしいんだそうだ。」

「池袋だと？」

真面目な会話にデストロイヤーが加わり、チェロンは安堵し、サムライは心の中でガッツポーズをとっていた。

「池袋のどこだ？」

「そこまでは聞いていないね。」

東京都庁のある新宿から池袋まで、山手線で数分である。

だが侵略者達が蔓延る東京に公共交通など機能していない。

移動手段は自分達で確保しなければならない。

「連れて行ってほしい理由は何？」

「依頼者に聞きなよ。」

「安全ではないな、池袋は。」

「一般市民かの依頼じゃないから、依頼者も戦力になるつもりだと思っよ。」

依頼の理由は不明だが、どうやら依頼者は池袋まで行く兵力がほしいらしい。

「時間はあるから、とりあえず話だけでも聞きたいな。」

「賛成だ。依頼者はどこだ？」

「アンタ達の後ろ。」

No4 少女からの依頼

立っていたのは少女だった。

薄黄色の長髪をツインテールに縛り、それを紫のリボンでとめている。

黒と紫を基調にしたゴシック人形のような服をまとい、身体とタイツをはいた両足は針金のように細かった。

そしてなぜか頭の上に、冠がのっている。

「ええと…。」

サムライは見慣れぬ姿に困惑している。

池袋まで依頼者も戦力になると言っていたが。

目の前にいるは、シックではあるが可愛い服装に華奢な身体。

武器らしものも持っていない。

持っていたところで、この少女が戦えるだろうか疑問でもあるが。

物言わぬ少女に、デストロイヤーがチェロンに確認するが、依頼者はこの少女で間違いないようであった。

「池袋に何のようだ？」

「…聞いてどうするの。」

巨木のような男の眼光を前に、少女は冷めた眼差しを返した。

「依頼を聞いてくれたのは嬉しいけど、私はあなた達が依頼を受けるか受けないか早く決めてほしいの。」

少女は淡々と自分の気持ちと、事情を言った。

年上であるサムライと、遙か上に見えるサングラスに怯む様子は見られなかった。

怯むどころか礼儀が無い。

「で、でも、私達も依頼内容を詳しく知っておいた方が…。」

「『私を池袋まで連れて行って。』同じこと何度も言わせないで、イライラするから。」

「あなたのこともよく知らないし…。」

「私、深く他人と関わることが嫌いなもの。」

「あはは、そうですの…。」

なんとか円満に話そうとするサムライだが、取り付く島は無かった。

「お嬢ちゃん、口のきき方には、」

「お嬢ちゃん呼ばわりしないで。怒るわよ。」

嬉しい、イライラする、嫌い、怒る、といった感情表現を立て続けに並べた少女。

ポジティブな言葉が実に少ない。

そして、少女からのキツイ言葉を受けたデストロイヤーだったが心は傷つかなかった。

丸太のような腕を組み、ジッと考え始めている。

「どつするんですの、ヒーロー達、この子の依頼を受ける？」

「どついたしましょう、デスさん？」

「お前ら、お嬢ちゃんの口が移っているぞ。」

「お嬢ちゃんって呼ばないで！」

三人の下から、荒い少女の声が聞こえた。

見ると少女は小さな拳をギュツと握りしめ、猛獣のような顔で三人を見上げていた。

「…子供扱いしないで！」

「い、ごめんなさい。そんなつもりじゃ…。」

そんな少女を前に、チェロンが二人の耳元で囁いた。

「あの子の依頼は二時間前から出ていたが、あの子を見るなりみんな断っていたんだよ。」

「二時間前だと、緊急の依頼じゃなかったのか？」

「その緊急依頼が二時間前に出て、今にいたるといわけた。」

「そんな…。」

少女は二人へ背を向け、リボンのついた靴で地面を擦りながら、ロビーへと歩き始めた。

サムライが呼び止めようとするも、少女は振り返らず、イスへと腰掛けるのだった。

「どうやら二人を諦め、次の依頼者が見つかるまでそうしているつもりだよ。」

「ありや、怒らせちゃったか。」

少女の様子を見ても陽気なチエロンとは対照的に、サムライは暗い表情を浮かべている。

「迷っているのか？」

「どういう事情があるのかわからないけど、このまま放つてもおけないし……。」

「同感だ。」

「デスさんもそう思う？」

「ああ。」

「でも……。」

ためらうようなサムライに、デストロイヤーは組んでいた腕を下ろし、彼女の頭へ手をのせた。

「傷はもう完治している。心配するな。」

ゴツゴツしたデストロイヤーの返事にサムライは安堵のため息を漏らし、チェロンが依頼認証の手続きを始めるのだった。

No5 自己紹介

本来、ハッカーとは高度なコンピューター技能や知識を持つ人を指す。

だがその意味は誤用され、ハッカーとは悪意を持ってコンピューターシステムを破壊する人を指す意味となってしまうていた。

2000年代まで、ハッカーの攻撃はいたずらレベルのものが多かったが、2010年代となるとその被害数も質も急速に変わった。

スマートフォン専用のウイルスが作られたことで被害数は増え、とある国のウラン濃縮施設のシステムをハッキング、及び破壊する程度にまで被害の質は成長した。

陸、海、空、宇宙に次ぐ第五の戦場としてサイバー空間が上げられるほどになり、『ハッカー』という肩書きは進化を続けていったのだ。

そして、その肩書きをコードネームに持つのが先を歩く少女であった。

小さな背丈と、その足の長さでせつせと先を行く少女の背中をサムライとデストロイヤーが追いかけているのだった。

正面玄関へと歩くこの三人の姿は、先を歩く妹を追う姉と兄（父親みも見えるが）のように見える。

「依頼を引き受けてくれてありがとう。私はあなた達と違って戦闘は不得意だけど、敵の能力を分析してその脆弱性をつくことに特化しているわ。」

改めて確認してみたところ、彼女も特務機関ムラクモに所属する戦闘員のようなのだ。

見慣れない姿だがそれも仕方ない、少女がいつ所属したのかもわからず、百人前後から成る戦闘員の顔全て覚えられるわけなどない。

「コードネームは『ハッカー』。とりあえず依頼が終わるまでよろしく。」

一切振り返ることなくハッカーは挨拶と自己紹介を終えた。

今度はこちらの自己紹介かとサムライが意気込むや否や。

「あなた達…、『サムライ』と『デストロイヤー』ね。」

ハッカーは初対面二人のコードネームを言い当てた。

よく見ると小さな背中に隠れた少女の腕から、青白く透明な光線が垂直に立っているではないか。

小走りで歩きながら、ハッカーはその光へと指をあてる。

「あなた達の戦闘実績はかなり高いわね。依頼を申請してからかなり時間がたったからハズレくじしか残っていないのかと思ったけど

…。」

ハッカーの指にあわせ、顔写真までもが映る光の画面が動いているが、画面を支えるディスプレイは無い。

画面は実態の無い光のようにそこに浮かんでいるだけなのだ。

「余り物にも福があるのね。」

ハッカーが腕を下げると、薄く平らな光の画面は跡形も無く消えるのだった。

「『ハッカー』か、じゃあ『ハツちゃん』だね。」

「…。」

サムライの言葉にハッカーは何も答えない。

自分の能力を説明したはずが、まさか名前に食いつかれるとは思わなかったろう。

「でも呼びづらいな。じゃあ『カーちゃん』かな。これだとお母さんみたいになっちゃうような…。」

歩きながらサムライがおでこに人差し指を当て始めた。

「じゃあ…『ハーちゃん』…かな。」

「おい、やめておけ。」

やめさせようとするが、ハッカーからの口から拒絶は無かった。

「……………好きにして。」

変な名づけにハッカーが喜ぶとは思えなかったが、意外にも彼女がそれを否定しなかった。

肯定でもなかったが、いつの間にか先を歩いていたハッカーの背中がサムライ達へと近づいていた。

廊下が終着に近づくと、ハッカーの背中を通りこし、デストロイヤーが正面玄関のドアに手をかけた。

その時、聞きなれた声が二人を呼び止めるのだった。

№6 その男、おバカにつき

「よう。デカブツとお嬢さん。」

見ると黄色いスーツにオールバックヘアの男が立っていた。

「この野郎。」

とデカブツと呼ばれたデストロイヤーは、ドアから離れ男へと進撃する。

両腕を揺らしながら近づく巨体を臆することなく、ニヤニヤと黄色い男はそのサングラスを見上げている。

何を思ったのか、男は握手するように右手を斜め上に差し出した。

対してデストロイヤーが左手を斜め下に出し、出されたそれをつかんだ。

握手するよう組み合わさった不似合いな二つの手。

しばらくの沈黙の後。

「…痛い。」

黄色男の顔が歪み始めた。

「痛い痛い痛い痛い、ギブギブギブ、ギブアップ!」

ひたすら手を振りほどこうとするが、デストロイヤーは放さない。

「誰がデカブツだ？」

「許してデスちゃん！俺が悪かった！」

「ちゃん」付けで呼ばれることが嬉しいわけがないが、謝っている
のでとりあえず男の手を解放するのだった。

「あ、ああ…。全然かなわないぜ…。俺だって鍛えているのによお。」

「所詮鍛え方が違う。飛び道具に頼るお前では俺に勝てん。」

「まあ、さっきのは俺も本気を出さなかったからな。」

「なに？」

先ほどの悲痛な表情はどこへやら、男はケラケラと笑い出した。

笑い声を見上げハッカーは遠慮なくため息を吐き出したのだった。

おバカなこの男も「サムライ」や「デストロイヤー」と同期の特務
機関ムラクモに属する戦闘員である。

「トリックスター」

それがこの男のコードネームだった。

見上げつつもバカを見下すような目つききのハッカーに気づき、サム

ライは慌ててその口を封じようとする。

「トリさんは今から外へ行くんですか？」

「な、なぜわかった…！」

まるで知られたくない過去の過ちを解き明かされたかのごとく無駄に劇的に驚き返すこの男を前に、再び腹式呼吸からの全力のため息がハツカーの口から吐き出される。

サムライは苦笑いを浮かべ「姿を見れば分かりますよ。」と返すのだった。

「ハハハ、だよな。一目瞭然だろ。」

トリックスターの背中に巨大な筒がまかれていた。

そして両太股にはホルスターと両肩から腰にまかれたベルトと膨らんだポケット、この男の戦闘時の服装であった。

「俺はデカブツと違ってか弱いからな。お守りがたくさん必要なのさ。」

「どこへ行く予定だ？」

「とりあえず新宿駅から山手線だ。」

山手線という言葉に三人が反応する。

「面白い機械を見つけたんだ。その点検も兼ねて少し山手線を行くかと思つてな。」

侵略を受けたとはいえ東京にも様々な機械が残っている。

侵略を生き延びた人類はそれらの中から使える部品を集め独自で武器や道具を開発することがあった。

どんな機械かと、サムライが聞くと彼はこう答えた。

「もともとは大型トラックのエンジン部分だ。で、その車輪部分を改造して線路を走れるように設計したのさ。線路自体に問題がなければどこまでもいけるだろうが、何せ試作機だからな。点検も兼ねて近場を走ろうと思つていて、まあ池袋までかなあつて思つていたんだけど、………つてなんだお前ら、近い近い近い、近いって！」

超ご都合のいい話へ、三人の顔が磁力に引き寄せられるかのごとくトリックスターへと迫っていた。

「それを使えば池袋まで早く着けるのか。」

「で、ですけど…。」

「何人乗り？」

「五、六人は乗れるが…。」

「ねえハーちゃん。目的地は池袋駅から近いかな？」

ハッカーは何も答えず、トリックスターの前に立った。

時間の浪費かと思いきや、目の前にいる男は池袋まで最速でたどり着ける手段を持っている。

そして依頼を引き受けてくれた二人はこの男と顔がきくらしい。

渡りに船とはこのことである。

「さつきから気になっていたんだけど…。この子誰？」

ため息を吐き出しそうになるが時間の節約のためにそれを抑えハッカーは言った。

「私を池袋へ連れて行って。」

No7 眠れる獅子

「今何時？」

「昼の二時だ。」

「早すぎるよあ。」

「早すぎない。」

「ゆうべさあ、足が冷えちゃって冷えちゃって眠れなくてさあ…。」

「

「それはお気の毒にな。」

トリックスターは都庁のエントランス広場（路上）で丸まっていた青年を起こした。

「で、今何時？」

「昼の二時だ。」

「人間が起きる時間じゃねえよあ。」

「起きる時間だ。さあ行くぞ。」

肩を貸し、酔っぱらいを担ぐかのように一緒に歩き出す。

「だいたい今何時だ？」

「昼の二時だ。」

寝ぼけて同じ質問を繰り返すこの青年が、トリックスターの相棒である。

青年という表現は正しくないかもしれない。

やせ細った体と、常にお辞儀をしているかのように七十度に曲がった腰、そしてボサボサの白髪を隠すように深くかぶったフード。

不良という表現をすべきだろうか、それともインフルエンザ患者と表現すべきだろうか。

「アハハ、相変わらずだねサイさん。」

「今何時？」

「お昼の二時だよ。」

『サイキッカー』

それがこの青年のコードネームである。

武器を使わず、人知を超えた攻撃手段を持つことからそう名付けられた。

だが日頃の彼の姿からその力を疑問視する者を多い。

というか、どうして路上で寝ていたのか。

ハッカーが相変わらず嫌なものを見るかのようにサイキッカーを見

上げているが、それは彼女の性格によるものではなく、初対面の者のほとんどが彼女と同じようにしたであろう。

「新宿駅まで一緒に行こうと言ったが、コイツは元気ハツラツになるまで戦力外と思った方がいいぜ。」

「だろうな。できるだけ早く起きてくれると頼もしいがな。」

「ほらね、デスさんすらもサイさんのことをすごいと思っているんだよ?」

サムライが不満げな顔を浮かべるハツカーへ言うが、彼女は聞く耳を持たなかった。

ハツカーは何も言わず、リボンのついた革靴の音を響かせながら、さっさと先へ進んでいくのだった。

サイキッカーどころかサムライ達にも興味がないかのようだ。

「ハーちゃん…。」

「急いでいるようだからな。これ以上無駄話はできない。」

「今何…。」

「それは悪かった。コイツはともかく、俺は足を引つ張らないぜ。」

それに四人が続き、一行は中央通りを進み、新宿駅へと向かうのだ
った。

No8 苦渋の決断

砂糖のたっぷり入ったコーヒーを一気に飲みほし、男は休憩を終えた。

マグカップをそのままにし、自室を出、指令室へと戻る。

仕事はいつも疲れるが、今日はよりいっそう疲れている気分がした。

彼は苦渋の決断を下したからである。

彼は『特務機関ムラクモ副長官』の肩書きを持っていた。

名前は『桐野礼文』きりのあやふみ。

名刺を渡しても、正しく呼んでももらえることが少なかった。

決して難しい字ではないが、漢字は現代の日本で失われつつあったからだ。

もっともドラゴン襲来以降の日から名刺など渡したこともなかったが。

彼の名は礼儀を重んじる父親と、文学科の母によってつけられた。

その影響もあって、桐野の外表面は誠実で知的な雰囲気漂い、さらに細いフレームの眼鏡がそれをいっそう際立たせていた。

絵画の並ぶ廊下を歩いてしたが、桐野はずっと自分の足下に視線を落としていた。

犠牲無くして勝利は無い、とひたすら自分に言い聞かせたのだ。

決断を下したのは二時間前である。

池袋を調査していた戦闘員からの救援要請が本部に届いた。

救援地点の距離、時間、必要兵力を踏まえ、桐野は冷静かつ迅速に決断を下した。

救援を待つ戦闘員へオペレーターが無線機に告げた言葉は

「現状戦力で対処せよ、以上。」

であった。

ドラゴンの数やフロワロの規模でさえ把握しきれていないにもかかわらず、不確実に貴重な戦力を削ぐわけにはいかない。

そして現段階における最重要作戦が『歌姫計画』なのだ。

余計なことにエネルギーを注ぐわけにはいかないのだ。

だが彼は非常になりきれない。

ドラゴンとの戦いが続く限り、この仕事は続き、彼の心は蝕まれていくだろう。

司令室のドアを前にし、桐野は胸ポケットからIDカードを取り出しそれをかざした。

こうしたことを続ければ、戦闘員達の士気を落とし、やがて内部分裂が起こる危険性もあったが。

この指令室には一般人はおろか、戦闘員達でさえ簡単に入ることはできないのだ。

ハッキングでもされない限り公に出ることはないだろう。

No1 山手線

山手線は姿を変えて顕在した。

線路の一部は途切れ、倒れたビルが横になり、あるところは電車自体が道を阻み、かつて首都上空に描かれていた楕円はつぎはぎだらけとなっていた。

無論、電車は走っておらず首都を繋ぐインフラとしての機能は果たせていない。

それが今の山手線であった。

その灰色の線路を錆び付いたトラックが走っていた。

普通の軽トラックだが、バンパー部分の下半分にはL字に曲げられた鉄板が貼られていた。

三角に突き出た鉄板が小さな瓦礫をかき分け道を切り開いている。

運転手にはトリックスター、助手席にはサイキッカーが体育座りで眠っている。

そして三人は荷台に乗っていた。

隅に座ったハッカーに寄り添うようにサムライが腰かけ、なぜかデストロイヤーだけ腕組みをして立っている。

荷台から飛び出たその姿をみると、このトラックが銅像を運んでいるかのようにみえる。

「時速二十キロは出ている…これなら早く着けそうだ。」

どうやら流れる景色を見て速度を計算しているようだ。

筋肉バカに見えて、意外にグラスハートであり、意外に知的かもしれない。

サングラスが陽の光を反射させることはなく、映るのは破壊された都市の風景とそれらに寄生する蔓とフロワロだった。

時折それらの合間を蠢く気配も感じられる。

今の首都は侵略者達インソムニアの縄張りであり、池袋へ下りればその縄張りへと立ち入ることとなる。

「ハーちゃん？」

ハッカーが荷台から運転席の小窓をのぞいた。

「…御用ですか、ハッカーさん？」

事前にお嬢ちゃん呼ばわりと無駄な会話を嫌うことを聞いたため、
トラックスターは普通に話した。

「中を見たくて。」

「改造とは言ったが、この車は故障していた本来の部品の代替品を
集めただけさ。」

「見てわかったわ。」

「そうか。」

トラックが揺れ、背伸びを支える爪先がさらに揺れている。

「こんな広い荷台ならもっと大きなモノも運べそうだね。」

「その通り。使える設備や機械が発見できれば都庁まで楽に運べる。
だからトラックにしたのさ。」

「…人も運べるわ。」

「…?」

サムライが横から顔を出したためか、避けるようにハッカーは背伸
びをやめ、もといいた場所へ座ろうとした。

しかしその時、聞きなれない声が彼女を止めた。

「計器が狂ったぞ。」

その声は助手席からであった。

見ると眠っていたサイキッカーが目を開いていたのだ。

「起きたか？」

「。。。。。」

「サイさん、狂ったってどういうこと？」

「一瞬だったが計器全部の針が止まった。運転していて何か違和感は無かったか？」

彼は質問に的確に答えた後、トリックスターへと確認した。

「ああ、ほんの数秒だったがアクセルの抵抗が妙に大きくなった。五、六キロ走ったが、おかしくなったのはそこだけさ。」

彼の目覚めに驚くことなく、トリックスターは運転開始からここまですべて記憶していた事実を淡々と言った。

「どんな抵抗だった？」

「強く踏んでも車が前に進まない感じだ。まるで真下から引っ張られているみたいにな。」

ただの計器の異常であればトラックの故障かもしれないが、運転手の言葉から、彼は何か原因が別にあると察しているのだろう。

「…サムライ、ハッカー。君たちは何か感じたか？」

サイキッカーが振り返らず、後ろの二人へ言葉を投げる。

「いえ。」

「私も特に何も…。ただ…。」

「ただ、なんだ？」

催促する彼に、サムライは自分の刀を掴み、首をかしげながらも答えた。

「刀が一瞬だけ、重くなったような気がしたの…。」

「刀が？」

「勘違いかもしれないけど。」

「……………」

答えを聞くとサイキッカーは同じ姿勢のまま、小さなうなり声を上げた。

誰に言われたわけではないが、三人は彼の次の言葉を黙って待った。サムライとトリックスターは彼がただの睡眠不足の病人でないことを知っていたからだ。

そして彼の真面目な声とそれに答える二人の姿から、ただならぬ様子でハッカーも彼の言葉を待っていたのだった。

だが沈黙を破った第一声は、

「わからない。」

その言葉にサムライがズッコケ、ハッカーがため息を漏らし、顔を下げもといいた場所へと座った。

だがトリックスターだけは真剣な表情を維持したまま、聞き返していた。

「何が、わからない？」

「…足下の怪物に勝てるかどうか。」

その言葉にサムライが顔を上げた。

「…サイさん。ひょっとして、」

彼女の表情も声も、都庁やハッカーに見せていたものとは別であった。

彼女も車体と計器の異常が故障ではなく、そして刀の重みがただの勘違いでもないと察していたのだ。

そんな彼女に言葉は返さず、彼の最後の言葉はたった一言であった。

「この付近は早めに抜けた方がいい。」

「そうだな。」

サイキッカーの指示に、トラックスターはさらにアクセルを踏み込んだ。

エンジン内部で燃えた空気がギアを動かし、その動きは様々な軸を通じ最終的にタイヤへと伝わる。

金属むき出しのタイヤが火花を上げ、コンクリートに囲まれた線路の上をトラックが走りぬけていった。

N o 2 池袋

三人はスクランブル交差点を渡りきった。

後ろには様々な路線の出発点をもつ巨大な駅がたっている。

新宿駅同様に構内は広く複雑であった。

ホームから出口へ行くだけで右往左往と歩き周り、途中何度か怪物と遭遇したほどだった。

さらにその駅には百貨店が隣接し、この駅を中心に繁華街が形成しているかのようだ。

本来なら中央の壁面に駅名を記した文字看板があったが、それは半壊していた。

そして駅から続く町は渋谷と並ぶ山手の副都心、池袋であった。

スクランブル交差点を渡った先には、中央に白い線が描かれた長い道が続く。

その道は今も昔も道路と呼ばれている。

車が大量かつ同時に走るために作られたらしい。

だが今は道の両脇に立つ廃墟ビルから崩れ落ちた瓦礫や鉄骨が散乱し、本来の役目をはたせそうにはなかった。

風が吹くと錆びた鉄の臭いが鼻腔を刺激し、まきあげられた花びらや花粉が入らぬよう視界を細めなければならない。

半壊したビルの隙間から毒々しい極彩色の花が咲き乱れている。

渋いコンクリートの色に生えているため、けばけばしいそれらの花は異様な存在感を放っていた。

花だけではない。

発信源不明の大樹の茎や枝が蛇のように建物にからみついている。

血管のような細かなサイズもあれば、内部から壁をぶち抜くような大樹もある。

荒廃した都市とは対照的にそれらの花は生い茂り、大樹は丸々と太っていた。

まるで都市から生命を奪い尽くし、自らの命を繋いでいるかのようだった。

「ハッカー。」

デストロイヤーが我先に行く背中を呼んだ。

都庁から駅の中、そしてこの暗い道路でも、ハッカーは先を歩いた。

「おいハッカー。」

「歩きながら答えるわ。」

「ハーちゃん。」

「じゃあ歩きながら提案しよう。俺が先頭に立つからハッカーは後ろへ下がれ。」

三人がどこを目指すかトラックからホームにおりた時に聞いていた。

目的がわかれば、ハッカーが先頭に立つ必要も、メリットも無い。

トリックスター達はトラックの点検も兼ねて駅のホームへと残っているため、彼女を守るのはサムライとデストロイヤーだけなのだ。

そしてそれは彼女もわかっていたのだろう。

「わかったわ。」

と言うと、その場に立ち止まり二人が来るのを待つ。

が、その間も腕から光の端末を広げ、これからのルートを検索しているのだった。

「目的地へはこの大通りを道なりにまっすぐ、東池袋で右折して最初の交差点を左折すれば最短ルートよ。」

三人が目指す場所は、東京都豊島区東池袋3丁目、サンシャインシティ・ワールドインポートマーケットビル。

通称名、池袋サンシャインであった。

No3 レッド・モンキーズ

「ねえハーちゃん、高い所は得意？」

「いいえ。」

「私も。高い所は届かないから苦手かな。」

「私はある程度距離が近くないと敵を分析できないから苦手。だけど近接戦闘も得意じゃないけど。」

「大丈夫だよ。基本的に私達を守るから、敵に隙ができればハーちゃん分析してくれればいいよ。」

「作戦会議は終わったか、…くるぞ！」

三人は立体高速のちょうど真下におり、天井のように空を覆うコンクリートを見上げていた。

これに対し、三人を見下ろす影が二つ。

コンクリートに巻きついた蔓につかまり、宙を移動する二匹の怪物がいたのだ。

マツカザル。

可愛らしい名前とは裏腹に、岩石のような肉体の持ち主である。

丸太のような腕で蔓をつかみ、巨体をグラグラと揺らして移動するその姿はサルというゴリラである。

二匹はほぼ同じタイミングで蔓を放した。

「チャージ…。」

おりてくる赤毛の巨体に目を合わせつつも、デストロイヤーは落ちていた様子で両拳を胸の前に合わせ、力をためていた。

「…完了。」

拳を解くと、空を切る音が消え、ほぼ同じタイミングで二匹の後ろ足が地上へとおりた。

道路を粉碎する着地音が聞こえるよりも早く、デストロイヤーが一匹へと駆けていた。

迫る彼を認識し、マツカザルも両腕を振り回し迎え撃つ。

二つの巨体が一気に近づき、マツカザルの間合いに入った瞬間、走りつつもデストロイヤーは膝と腰を曲げた。

中腰姿勢で振り回される両腕をかわすと、下段から構えた拳をマツカザルの顎を目がけ、一直線に突き上げた。

アッパーの衝撃と共に宙を見上げているマツカザルは、両腕の動き

が停止し事切れたようにゆっくりと地面へと倒れていく。

さらにそこへ、遠心力の加わった肘うちがマツカザルの胸を打ち抜き、マツカザルはアッパーの衝撃を堪能することなく、なぎ払われていくのだった。

休む間もなく、視界から消えたマツカザルの後ろから二匹目が襲いかかってきた。

先程のバカなサルに行く末を見たためか、そのマツカザルは冷静だった。

地面に落ちた石や瓦礫でデストロイヤーを牽制し、彼が踏み込もうとすればそれに合わせて距離をとる。

マツカザルは牙をむきだし、拳で胸を叩き挑発してくる。

サルのくせに賢い、というか性格が悪い。

先程のサルとはえらい違いである。

個体によってここまで差が出るとは。

というか、コイツ様子見のためにわざとさっきのサルよりも後ろにおりたのではなからうか。

などとサルの感想を述べている間に、そのマツカザルは突如動いた。

デストロイヤーを駆け抜け、彼の遙か後ろに立っていた二人へと走りだしたのだ。

「サムライ！」

デストロイヤーがマツカザルの巨体を迫うが、彼の耳に足音ではない別の音が聞こえてきた。

「…！」

空を切る音を聞き分け、間一髪で落ちてきた巨体をよけた。

道路を砕いた新たな敵の正体は、三匹目のマツカザルであった。

どうやら、立体高速に張られた配水管の影に隠れていたらしい。

なぜならコイツの片手にひしゃげたパイプが握られていたからだ。

「ちっ！」

舌打ちする彼にパイプが襲いかかり、彼の認識が二人から目下の敵へと変わった。

地面を転げ回りながら距離をとり、「ソイツは任せた」とデストロイヤーは相棒へと告げた。

言われる前からサムライは、迫るマツカザルへと構えていた。

「大丈夫だよ。少し離れていてね。」

腰にまきついていたハツカーの細い腕をふりほどき、サムライはしがみつこうとする彼女を少し遠ざけた。

震える少女から目をそらすとマツカザルを見、親指で鎧を上げ、右手で柄を握った。

このマツカザルは賢い。

相手の戦い方を知った上で襲いかかり、目下の敵にとらわれることなく別の標的へと移し替え陣形を崩しにかかる。

かなり戦い慣れているのかもしれない。

そしていくら刀といえ、この巨体を一撃で止めることはできないだろう。

仮に倒せたとしても、敵と刀の間合いがほぼ同じとなれば相打ちはさけられない。

だがサムライはとった行動は、動くことなくただ静閑した。

サムライにとってこれは居合いの構えを意味している。

その後ろ姿にハツカーがオロオロとしている。

サムライの居合いを知ってはいるものの、この状況下でそれを行う

のは明らかに無謀だと、ハッカーは思っていた。

だがサムライは迫るマツカザルになおも不動の姿勢を保っていた。

そして、マツカザルの息が耳に届いた瞬間、サムライは目を見開き、刀を振った。

だが刀がマツカザルを斬ることはなかった。

切っ先がかすかにマツカザルの喉元をかすめるが、わずかに届かなかったのだ。

「サムライ！」

ハッカーが叫んだ。

刀がよけられれば絶対的な隙となる。

居合いが早すぎたのだとハッカーには見えた。

だがサムライの思考は違った。

「遅すぎたか。」

居合いが終えた瞬間から切っ先が喉をかすめるまで、マツカザルは足を止めていたのだ。

サムライが刀を抜いた瞬間、そのまま進めば刀の間合いに入ってしまった。まうと悟り、マツカザルは無防備に突っ込むことなく足を止めたのだ。

防御すれば致命傷は避けられるが、負傷することには変わりはない。

そのためマツカザルは足を止めた。

そしてサムライは、その賢いマツカザルの動きを先読みしていた。

適当に振った刀の切っ先が頂点より遙か下に位置していた時、柄を両手で握り直し、そこからさらに一步踏み込み、構え直した刀を振り下ろした。

マツカザルの悲鳴が鳴り響き、三匹目がそれに気をとられた瞬間、デストロイヤーのフックがから空きの顎をとらえ、二発目のフックがあばらを砕いた。

振り終えたサムライはすかさずすり足で後退し、構えを正眼に戻しマツカザルを見た。

マツカザルは、一匹目と同じように宙を見上げ背中からゆっくりと倒れるのだった。

賢さゆえ、それをサムライに動きを先読みされたのだ。

そしてダブルフックを受けた三匹目も、デストロイヤーの拳が離れると力無く揺れ、前のめりに倒れた。

時間差で地上におりた二匹は、同じタイミングで骸となったのだった。

「…無事か？」

「怪我はないよね？」

敵の生死を確認するや否や、二人はハッカーへと振り返った。

「…大丈夫。」

自分へと歩み寄る二人を前に、ハッカーはサムライとデストロイヤーの戦績データを思い出しているのだった。

単純な戦闘力だけでなく、敵に対する対応力が半端ではない。

だが都庁にいた時にはそんな様子どころか、雰囲気すらも感じられなかった。

この二人は強いと、改めてハッカーは認識したのだった。

「ありがとね、ハーちゃん。」

「…え？」

いったい何が嬉しいのか、近づいて来るサムライがニヤニヤと笑みを浮かべている。

「どうした？」

歩きながら、デストロイヤーがサムライを見る。

「エへへへ…。私が襲われた時、心配してくれたんだよ。名前

を言ってもらえてすっごく嬉しくて、泣きそうになっちゃった。」

「そうか。」

デストロイヤーがハツカーの冠に手をのせ、軽く叩いた。

「…やめてよ。」

頬が赤くなったハツカーに言われ、デストロイヤーが手を止めた。

だが、足音が止まらなかった。

「？」

サムライの足音も止まらなかった。

二人は左右に分かれるようにハツカーの両脇を歩き抜けたのだ。

「…どうしたの？」

「今度は間違いなく二人だな。」

「だね。」

二人の背中を追ったその先には、マツカザルとは別の敵が立っていたのだ。

直立する二つの影はボロボロの衣服をまとい、頭にはヘルメット、そして旧式の突撃銃を持っていた。

ゾンビアーミー。

ドラゴン襲来時に殉職した自衛隊の体が、フロワロの毒に侵され怪物化したものだ。

「私が先頭ね。」

「頼むぞ。」

「ハーちゃんはもう少し待っていてね。」

サムライが先頭を走りながら、迫り来る弾を刀と鞘で防ぐ。

銃弾を斬るたびに火花が上がるが、マツカザルを両断できる刀にあってそれは水滴を斬るようなものだった。

その背中にデストロイヤーが続き、ハツカーは打ち落とされた銃弾から身を守りつつ、ただ二人を見守っているのだった。

N o 4 花とドック・タゲ

巨体が地面にかがんでいる。

その体勢となつて初めて、ハッカーは見上げることなくデストロイヤーのサングラスを見ることができた。

しかし彼が見下ろしているのは彼が数秒前に葬ったゾンビアーミーであつた。

何を思つたのか、彼は二度目の死を迎えたゾンビアーミーの胸元へ手を伸ばした。

その理解不能な行為の一部始終にハッカーは目を疑つた。

巨人の手は胸元を探り、上げられた指先にはキラキラ光るヒモが引つかかつていた。

どうやらそれは金属製のヒモであり、ネックレスのようにゾンビアーミーの首に巻き付けられているようだ。

そして金属性のヒモには、同じく金属性の薄っぺらく平らな二枚の金属片が結ばれていた。

デストロイヤーはヒモを切り離すと、結ばれていた二枚のうち一枚を懐にしまい、そして、何を思つたのかゾンビアーミーの口をこじ開けもう一枚をその中へ押し込んだのだつた。

「何を…！」

「悪いな、すぐ終わらせる。」

急ぎたいがためにハッカーは声を上げたわけではないのだが。

デストロイヤーはもう一人のゾンビアーミーにも同様なことを始めた。

「ドック・タグだよ。」

刀を拭きながらサムライがハッカーに声をかけた。

ドック・タグ・・・名前ぐらいは聞いたことがあった、軍人の首に下げられた名札のようなものだ。

「軍人さんは遺体の回収ができない時に、ああしてドック・タグの一枚を回収してもう一枚を遺体の口に入れて後で回収するんだって。」

そうすれば遺体の見分けがつき本部で誰が戦死したのかすぐにわかる、と聞きハッカーは初めてドック・タグの使い方を知ることになった。

だが過去の死者にそうする意味はあるのだろうか。

「待たせて悪いな。行こうか。」

二人へ戻るとサングラス越しにいぶかしげな顔をする一人が見えた。

デストロイヤーは苦笑いを浮かべたが、それ以上気にするような素

振りは見せず、先頭に立ち先へと進み始めるのだった。

この立体高速、正式名『首都高速5号』を横切れば目的地はすぐなのだ。

ハッカーは妙な気分だった。

自分を気遣って急いでくれるのはありがたいが、今の行為は何のために行ったのか。

それが気になってハッカーの足は止まり、怪物の遺体が転がる道路へと振りかえってしまった。

それにサムライが気付くと、彼女はハッカーへこんなことを言い始めた。

「『この人達がいなきゃ今の東京は存在しなかった。自衛隊が時間を稼いでくれたおかげで大勢の人がドラゴンから逃げ延びることができた。』」

その言葉には抑揚が無くまるで誰かが口にした言葉をそのまま再現しているかのようなようであった。

見上げてくるハッカーに、サムライは刀を納めた後に台詞を続けた。

「『そんな偉人の遺体を、せめて人間らしく埋葬してあげたい。』」

「偉人……。」

偉人と聞いて思いつくのは個人名がほとんどだろう。

たとえ科学者であろうと、政治家であろうと、教師であろうと、「尊敬する偉人は？」と聞けば、帰ってくる言葉は固有名詞だが、先を歩く戦闘員は違うようだ。

「今のジエータイはドラゴン用の装備も武器もあるけど、昔の自衛隊にはそんなもの無いし、私達みたいに特別な力もなかった。それでも必死でドラゴンと戦ったんだよ。」

棒読みの声とは違い、今度の口調には力と思いがこもっているように感じられる。

「そして大勢の人を救った」とサムライは言い、デストロイヤーの背中を見、彼女につられてハッカーも彼の背中を見た。

遠くなっていくその巨体の先に、彼女の目的地である池袋サンシャインが立っている。

当然といえば当然だが、さすがの巨体もビルの前では小さく見えた。

彼も一応人間だ。

多くの人に助けてもらい、支えられ生きてきたのだ。

ドラゴンが襲来したのは今から十年前、つまり二千十年。

当時のデストロイヤーがどこで何をしていたのか不明だが、少なくとも現在のような肉体と戦闘技術を兼ね備えてはいなかったろう。

若かった彼も、一般市民同様にドラゴン侵略から逃げ回っていたはずだ。

そして力無き市民を守ったのが自衛隊なのだ。

「デスさんは、自分を助けてくれた自衛隊ひいたちに応えたいんだと思うな。」

「…。」

サムライの言葉に、彼がムラクモの戦闘員になった理由が少しだけわかった気がするのだった。

誰に命令されたわけでもなく、彼は自らの意思でドラゴンと戦う道を選んだ。

自分とは真逆だった。

自分がムラクモに所属した理由は、ただ『ハッカー』としての能力があったため連れてこられただけ。

そして今朝の一件で、そのムラクモにも愛想が付きかけていたというに。

「ハーちゃん？」

「…とりあえず歩きましょう。」

「ごめんね。余計なこと話しちゃったかな？」

「いえ。」

「ならよかった。」

「…サムライ。」

「あ！また呼んでくれたね私の名前！エへ…、御用件は何でしょう？」

『名前』といってもそれは『コードネーム』であろうと思ったハッカーだが、不思議と彼女の笑顔が憎めなくなっていた。

彼女の笑顔につられハッカーも笑顔になりかけたが、どこか恥ずかしくなり、頬が緩む寸前で今の顔表情をキープするのだった。

そしてその表情のまま、目を細めるサムライへ問うた。

「貴女はどうしてムラクモの戦闘員になったの？」

「私？」

一見フワフワしている彼女だが、常に自分を守ってくれ、そしてそれを可能にする高度な力を持つ彼女である。

デストロイヤー同様に何か大きな理由がありそうだとハッカーは思った。

最初はきよとんとした顔をしたサムライだったが、すぐに嬉しそうな表情に戻り、彼女は自らの経緯を話し始めた。

意外にそれは単純な理由だったが、聞き心地は悪くはなくハツカーは黙って聞き続けた。

少し場違いな会話が後ろから聞こえ、黙々と歩くデストロイヤーは内心仲間外れにされた気分になりながら、少し速度を遅め先へと進むのだった。

サムライが一方的に話しているのかと思っていたが、相槌をうつハツカー声が聞こえ、思わず振り返ると、並んで話す二人の姿が見えた。

先を急ぐからと無駄な話を嫌い、自分達にも興味を示さなかったハツカーがサムライと話している。

二人の姿はまるで姉妹のようであった。

その姿に驚きつつも、なぜかデストロイヤーは安堵の息をもらすことができたのだった。

No 5 孤独な遺体

正面エントランスが破壊されていたため、三人は裏口から池袋サンシャインへと入った。

建物内部は外よりも薄暗かった。

密封された建物の中は、蔓のおいがたちこめている。

中央の廊下が建物の奥までまっすぐ続き、それに沿うように通路の両側には専門店の入り口が立ち並んでいる。

どの扉もガラス張りだが、所々に蔓が繁殖し、砕けたガラスが散乱している場所もある。

対照的に専門店奥へと続く廊下はもとの形を維持していた。

噴水のある休憩広場を抜けると、動かないエスカレーターを上り二回へと到着した。

景色は一階とさほど変わらない。

似たような縦長の構造が、垂直に何層にも作られているのだろう。

進み続けると、やがて突き当たりにさしかかった。

そこには今まで並んでいた店とは一線を越す、『入口』があった。

ハッカー曰く、ここで間違いないようだ。

そこは他とはまったく異なる建築様式であった。

入口にはがっしりとした西洋風の柱が立ち並び、じゅたんのしかれた広い通路を少し進むと灰色のネコの像が立っていた。

二本足で立ち横長に丸い頭部と、それに続く胴体。

そしてその猫、胸元に大きな蝶ネクタイをし、白い手袋と手触りのよさそうなスーツを着ている。

まるで紳士のような姿であった。

池袋のイメージキャラクターだろうか。

近づいて見てみると、本来は白色だったのがほこりにまみれ灰色になっっていることがわかった。

いったいここは何なのか。

「ナンジャタウン…。」

見るとハッカーが腕から光りの端末を広げていた。

「池袋サンシャイン二階、西側エリアは屋内アミューズメントパークになっているの。名前はナンジャタウン。このネコがここのイメージキャラクターみたいね。」

アミューズメントパークとなれば一風変わった施設にも合点がいく。

説明を聞きながらデストロイヤーはネコの像をマジマジと見つめていた。

それに気づくことなくハツカーは端末で地図を広げた。

「目的地はこの奥で間違いないわ。狭い道が続くから奇襲には注意して・・・」

親切に伝えるハツカーに、サムライは「了解。」と頷いたが、デストロイヤーは未だにネコを見ている。

顔は真剣そのもの。

腕を組み、ジツとネコの大きな瞳を見ている。

まるで芸術品を鑑賞するかのようだ。

「デスさん？」

「ん……………」

「道が狭いから、気をつけて？」

二度目の説明にデストロイヤーは「ああ」と返事をし、先を歩いた。入口を通り過ぎるとじゅうたんの敷かれた廊下が続いた。

廊下の両側には軍服姿にタバコをくわえたワシヤ、三角帽をかぶったお化けのネコなどの銅像が並んでいた。

彼らもこのキャラクターのようだ。

そして並んだ銅像を意識して、デストロイヤーの視線が動いているように見えるのは気のせいだろうか。

「デストロイヤー？」

ハッカーが下から呼ぶが返答が無い。

「…ねえ！」

このまま彼が先頭を歩いて大丈夫なのだろうかと不安になった時、思わず声を荒げてしまった。

だが返答は「しゃべるな」だった。

立ち止まった彼は大きな手のひらをハッカーの前に出し、隊列を止めた。

彼が後ろにさがるように手の仕草を送ると、サムライがハッカーの

肩をつかみ二歩下がった。

サングラスには肉片が映っている。

じゅうたんの廊下の先はY字に分かれていた。

左の道は三階へと続くエスカレーターがあり、右は鳥居の立つ洞窟があった。

洞窟といっても、もちろんそれは作り物である。

おそらく何かのエリアの入口なのだろう。

そしてその洞窟の前に、一体の怪物が倒れていた。

四肢を持つ狼のような外見を持ち、コチラに背を向け、洞窟側に腹を向けて倒れていたのだ。

床に黒く乾いたわだかまりができていたことから、息絶えているとわかる。

だがこの怪物がここに倒れている理由は何か、デストロイヤーはそれを考えていた。

ふと洞窟へと目を向けると、血痕が点々と奥へと続いている。

「ハーちゃん？」

サムライの声と共に、デストロイヤーの膝横をハッカーが通り過ぎていった。

「どうした？」

彼女は洞窟側から怪物を見下ろした。

怪物の腹には風穴がいくつもあき、中には反対側へ突き抜けているものまであった。

彼女につられ、同じく怪物を見下ろしたデストロイヤー。

そこで初めて気づいたことがあった。

一部の床や洞窟の壁に銃創のあとが残っていたのだ。

「これは…。」

詳しく確認しようと顔を近づけようとすると、その隣をハッカーが駆け抜けていった。

「おい！」

「待って一人じゃ危ないよ！」

呼び止めると少し迷ったようにみえたが、それを振り切ると洞窟の奥へと入ってしまった。

「急ごう！」

サムライが刀をぶつけないよう低姿勢で狭い洞窟を走り抜けた。

それに大きな体を四苦八苦させながらデストロイヤーが続く。

洞窟を抜けると神社や鳥居のジオラマが乱立する広場になっていた。

広場の真ん中にはこの空間全体を見回すようにネコの人形が立ち並んでいる。

そして二人の足下にはなおも血痕が続いていた。

半壊したジオラマをかいくぐり広場を抜けた先の通路に、ハッカーはいた。

彼女はこちらに背を向け佇んでいた。

サムライが呼ぶと、彼女は後ろから銃撃を受けたかのように振り返った。

だがその目はサムライ達ではなく、遙か遠くをみているようだ。

そしてサムライには見えなかったが、高い視野を持つデストロイヤーにはハッカー背中に隠れた部分を見下ろすことができた。

ハッカーの前に一人の女性がいた。

仰向けに倒れ、光の宿らない瞳で天井を見上げている。

顔には傷は無かったが、怪物の返り血を拭いた後が、石のように硬直した灰色の肌に残っていた。

衣服は裂け、露出された褐色の肌には、痛々しい傷跡が残っている。くの字になった両足が不自然にねじれ、片方の足の靴がなくなっている。

傷口は乾いていることから、おそらく死後数時間はたっているだろう。

だが未だに、床と衣服の間にはべったりとした血が付着している。

衣服も泥と血で汚れてしまい、本来の色をほとんど失っていた。

床に落ちた左手には拳銃が握られ、右手は胸の上に置かれていた。

そして右手には光を放つ無線機を握られていた。

おそらく最後の瞬間までどこかへ救助要請をしていたのだろう。

ハッカーがもう一度、それを見下ろしていた。

その足はかすかに震え、「お嬢ちゃん」呼ばわりされた時と同様に、小さな拳をギュッと握っている。

「この人…。」

ようやくサムライがそれを見、デストロイヤーは黙って腕を組んだ。

二人はハツカーの依頼を確信した。

ハツカーは再び振り返り、二人の間を歩き抜けた。

「ハーちゃん…。」

「ハツカー。」

「…。」

うつむいたまま、二人と目を合わそうとはしない。

都庁にいた時と同じだった。

ハツカーは二人に構うことなく我先に歩いた。

都庁との違いといえば、歩き方が乱暴であること。

小さな両手を揺らし、靴の踵が今までよりも強く床を叩いていた。

「デスさん、その人をお願い。」

黙って頷いたデストロイヤーを見ると、サムライはハッカーを追った。

「待って！」

サムライには彼女が先を急いでいるのではなく、この場から逃げようとしているようにみえたのだった。

「ハーちゃん！」

呼び止めようとするが彼女は振り返らない。

むしろその小さな背中が、サムライから逃げようとしているようだった。

道を塞ぐジオラマに、身を屈めながら追うが、次第に彼女の背中は遠ざかりやがて見えなくなってしまった。

「ハーちゃん！」

見失うまいと走り出した時、彼女の足が何かに引っばられた。

縄のようなものが足の甲にまとわりつき、思わずかかとを上げてそれをほどいた。

縄はジオラマから噴出した電気コードだった。

そして彼女の頭上で何かが揺れていた。

それを見上げる間もなく、一体の人形が彼女目がけて倒れてきたのだった。

どうやらジオラマの一部分として立っていたのだろう。

怪物の奇襲に比べればよけることなど簡単だ。

難なく反射的にそれをよけた。

落ちた人形が床に落ちると、頭の部分が砕け、鈍い音がテーマパーク中に反響した。

それは入口に立っていたものと同じネコの人形だった。

その頭部は砕けてしまっていたが。

シンと静まり返ったパーク内、今の音が怪物達を呼び寄せてしまうかもしれない。

自分の不注意を反省しながらそれを跨ごうとした時、サムライの足が止まった。

通路の先に見失った姿があったからだ。

「ハーちゃん？」

息を荒げたハッカーが立っていた。

彼女は何を言わず、ただ遠くからサムライを見ていた。

そして床に落ちた人形を見ると、今にも泣き出しそうな目でサムライを見つめ直した。

音を聞いて戻ってきたのだろうか。

ハッカーが戻って来た事への安堵と共に、サムライは彼女が戻って来てくれた理由がわかった気がした。

彼女は自分を心配して戻ってきたのではなからうかと。

サムライが人形を跨ぎハッカーへと歩み寄るが、彼女はもう逃げようとはしなかった。

見上げてくる少女を前に、サムライは膝をつき、彼女の体をそっと抱きしめた。

針金のようなハッカー体はかすかに震えている。

そして暖かかった。

「ありがとう。」

ツインテールの髪とリボンをそっと撫でると、かすかな少女の香りがサムライの鼻に届いた。

「ハーちゃん。」

「……」

サムライは彼女の耳元で優しく囁いた。

「泣いてもいいよ。」

その言葉にハツカーは一瞬息をのんだ。

それに反応したように、サムライはさらに強く彼女の身体を抱きしめた。

次の瞬間、小さな手がサムライのシャツを鷲づかみ、華奢な体が胸の中に落ちてきた。

サムライはただ黙り、彼女の体を受け止めた。

胸の間からは少女の嗚咽と悲痛な声があふれ出ている。

倒れていた人物がハツカーとどういう関係だったのか知るすべはなかった。

そしてそれを詮索しようとは思わなかった。

ただ今は溢れる感情を受け止め続けた。

サムライは目を閉じた。

サムライの胸が涙に濡れると、いつの間にか自分の目にも涙が溢れ

始めていた。

デストロイヤーが駆けつけても、二人の涙は止まらず、彼は黙って待つのだった。

No6 これより帰投します

「こつするしかない。」

片膝をついた身体をゆっくりと起こし、デストロイヤーが言った。

いかに精鋭の二人とはいえ、この遺体を抱えて無事に都庁へ戻れる自信はなかった。

それがわかっているのだろう、ハッカー上着を脱いだ彼を見上げ、コクコクと黙って頷いくのだった。

その仕草は彼の言葉に納得しているようだが、それ以上に彼に感謝しているようにもみえる。

ハッカーの目は未だに赤いが涙は渴いていた。

顔を戻すとハッカーは目を閉じ黙って合掌したのだった。

ゾンビアーミーのように死後も体を動かされていたらならともかく、死後硬直が進むとほとんど身体は動かせなくなる。

遺体は発見当初と変わらず仰向けに倒れ、両手には銃と無線機、両足はくの字に曲がっていた。

せめて安静な状態にしてあげたかったが、無理に硬直した体を動かすことはできない。

この周辺にはフロワロがないため彼女の体が毒に乗っ取られ、怪物化をおこす心配はないのが救いだっただ。

「都庁に戻ったらチエロンに報告しよう。いつか調査団が派遣されれば助けてもらえるだろう。」

ハッカーは手をほどくと、ゆっくりと呼吸を整え、二人を見上げた。

「ごめんなさい。」

そして頭を下げた。

「え？」

「ハッカー？」

ハッカーと二人の間に妙な空気が流れ始める。

いったいどうしたのか。

聞き返そうとするよりも早く、ハッカーが頭を下げたまま言葉を続けた。

「無茶な依頼を頼んでおきながら詳しい内容も告げなくて…。」

そこまで言うとハッカーはいったん言葉を切り、自分のスカートをギュツと握った。

そして少し小さな声で「わがままな態度をとって、ごめんなさい」

と続けるのだった。

都庁で出会い、無遠慮にため息を吐き出す彼女からは想像できない姿だった。

だがこうしている彼女が、素に近い姿なのだろう。

出会った時の彼女は依頼をことごとく断られた直後であり、そうした焦りと不満から無礼な態度をとっていた。

それを最初から理解していたのだろう、デストロイヤーは彼女を責めることなく、黙って頷くのだった。

頷いたところで下を向く彼女には見えないのだが、ここまで素直に謝ると思えず、驚きのあまり頷くだけでそれ以上何も言えないでいるのだった。

一方でサムライはため息を吐き、不機嫌な顔で下を向く彼女へと歩み寄っていた。

「そつだよ、ハーちゃんは悪い子。」

「おい…。」

サムライが手を軽く握り、王冠がのった彼女の頭をコツンと叩いた。が一度叩くとその手をほどき、彼女の頭を優しく撫でるのだった。

叩かれるとビクンと身体を揺らしたハッカーが、怯えつつも顔を上げた。

「次から気をつけるように！」

威張り顔のその表情を確認するとデストロイヤーが鼻で笑った。

それは数時間前、彼女自身が相棒から受けた言葉だった。

サムライもすっかり覚えていたのか、デストロイヤーを見上げニヤリと笑った。

サムライが両手をハツカーの両肩にのせると、ハツカーはようやく安堵の息を吐き出し、今度は表情を押し殺そうとすることなく、頬をゆるめるのだった。

そのやりとりはまさしく先輩後輩であるが、池袋サンシャインに来るまでの二人の姿を見てきたデストロイヤーには彼女達が姉妹のようにも思えた。

おそらく年齢も五、六歳は離れているだろう。

しかしムラクモもあんな少女を戦闘員として認めたものだ。

「それから、先輩に対して言葉使いは気をつけましょう！」

「はい！」

素直に返事を返すハツカーに「同期でも他人様を『ちゃん』付けで呼ぶバカな奴もいる。気にするな。」とデストロイヤーが言った。

「それって誰のこと？」

「わからないのか、あの黄色いアホ猿の…。」

アホ猿と言いかけ、池袋駅でトリックスターとサイキッカーの二人が自分達の帰りを待っていることを思い出した。

池袋駅で別れてから一時間は経過したているだろう。

デストロイヤーは頭を切り換えた。

「どうしたの？」

「サムライ、ハッカー。依頼は達成したからにはここには長居は無用。早く駅へ戻るぞ。」

冷静な指示を受けサムライとハッカーも思い出した。

「そうだね、戻ろうか。二人だけじゃ危ないもんね。」

「あのバカはともかく、サイキッカーがいるなら安全性。」

「デスさん言葉使いは気をつけなさい。」とサムライが指差すと「すみません。」と巨体が頭を下げた。

「ハーちゃんは大丈夫、歩ける？」

「平気、だけど少し待って。」

言いつつハッカーは腕から光の端末を広げた。

音も無く広がる青白い画面には、池袋サンシャインの立体図が浮かんだ。

ハッカーがタッチした部分が拡大され、内部の地形が映しだされた。拡大された画面には、ここナンジャタウンの平面地図が映っている。

「この奥に外へ出る近道があるわ。おそらく関係者専用の出入り口みたい。最初からそこから入れればよかつたんだけど、細かい地図データは建物内部に入らないとできないの。」

端末を閉じハッカーが言った。

「そういえば、どうしてこの人の居場所がわかったの？」

「無線機が生きていたから、その電波を傍受して場所を逆探知したの。」

「へ〜。(傍受って何?)」

棒読みのサムライを尻目にデストロイヤーがハッカーの示した先を見た。

だがそこには外へ出る扉らしきものは見あたらない。

一面ナンジャタウンの世界を彩る壁面が続いているだけであった。

「扉らしきものは…ないわね。」

ハッカーの言葉にデストロイヤーがすかさず答えた。

「テーマパークだからさ。外への扉は造形によってカモフラージュされ、パーク内部に自然にとけ込ませているんだ。」

淡々と聞こえたようだが、デストロイヤーの言葉にはどこか力があるもっている。

「…詳しいのね。」

「どうしてそんなことするの、わかりやすく作ればいいのに。」

「夢を壊さないために決まっているだろ！」

サムライの言葉に渴をとばすデストロイヤー、続けて「テーマパークの中に現実と繋がる扉があつては夢が壊されてしまつてはいないかと熱く語るのだった。

サングラスに後退る - ひいている - 二人の姿が映っている。

ネコの像をマジマジと鑑賞する姿といい、姿に似合わず彼はこうした場所に妙な思い入れがあるようだ。

悠々と歩き始めたデストロイヤーが、占い台のジオラマと融合したスタッフ専用の出入り口を見つけたのはそれから数分後であった。

「今、何時？」

「三時半だ！」

「まだ帰れないの？早く帰ってオヤツ食べようよお。」

「三人が帰ってくるまでおあずけだ！」

見回りから走って戻ってきたトリックスターがトラックのドアを開けると寝起きのサイキッカーが目をこすっていた。

「っで、今何時？」

「三時半だ！」

「夕べからさあ、何も食べてなくてお腹がペコちゃんだよ。おやつ食べ。」

「さつきチヨコレートかじっていたる！」

助手席にて窓にもたれて眠る相棒を尻目に、トリックスター運転手に座りエンジンをかけた。

「だいたい今時-？」

「-三時半だ！」

質問が終わるよりも先に答え、トリックスターはアクセルを踏み込む。

ググウンとエンジンがうなり声を上げ、錆びたトラックが池袋駅を出発した。

事前に方向転換しておいたため、トラックは既に新宿方面へと向きを変えていた、もしもこうなっていなければ間に合わなかっただろう。

屋根に覆われたホームを抜けると、暗雲に覆われた空が広がる。

「RPGをよこせ！」

トリックスターの声にサイキッカーは黙って座席の下から長い筒を取り出し、揺れる車内でそれを自分の両太腿で支えた。

筒には引き金のついた持ち手が付き、先端部から底までトンネルのように穴が開いている。

続いてサイキッカーは床下からスーツケースサイズの黒光りする箱を取り出した。

箱は嚴重にロックされており、座席の下に丸裸で置かれていた筒とは違い、慎重に扱われた。

その中に収納されていたのは筒に差し込む、弾頭であった。

弾頭は棒状部分と先端部にわけられており、一見すると短い槍のようにも見える。

棒のサイズは筒に比べ二回りほど細く、丁度筒の中に差し込めるようになり、ひし形部分はプラスチック製ででき、中には爆薬が詰め込まれているのだ。

筒に弾頭を差し込み、準備を整えたサイキッカーはようやくまともに喋ろうとした。

だがその直前、急ブレーキがかけられ彼は口を開くタイミングを失うのだった。

急発進させられ悲痛な音を鳴らして走ったトラックが、さらに悲痛な音をたて、駅のホームから百メートル程進んだところで急停止した。

慌てて両足で身体を支えようとすると太ももの力がゆるみ、目の前にあった弾頭が倒れ勢いよくフロントガラスにぶつかった。

「気をつけるよ!!!」

「どつちが!？」

「ここで爆発したら死んじゃうだろ!？」

トラックを止めると、サイキッカーの組み立てた武器をひったくるように奪い、トリックスターは車を出た、と思うと引き返して運転席側の窓から「お前もおりろ」と叫んだ。

言われなくても、眩きサイキッカーはゆっくりと車をおり、線路の端へと走る黄色い背中を歩いて追いかけた。

トリックスターが立つ目下には池袋駅前のスクランブル交差点が広がっている。

そこは九十分前に三人が歩いた場所だった。

地上から浮かぶ山手線からは駅前広場から池袋東口から続く大きな道路までを見通すことができた。

その大きな道路は『グリーン通り』と呼ばれ、池袋駅から東南方向に続き、東京都文京区（東京ドームの地域）まで続く都道である。

都道とあってさすが両側三車線と広いが、今は瓦礫や事故車に溢れ本来の役目はたせようがない。

そしてその都道も、三人が歩いた道であった。

今はそこに一匹のドラゴンが地響きをたてている。

ここからはかなりの距離があるものの、いや、距離があるからこそそのドラゴンがいかに巨大であることがわかる。

ジャングルにとけこむような暗緑色の鱗をまとい、翼は持たず、四本の足で地面を踏みしめるそのドラゴンは、「まるでアンキロサウルスだな。」とサイキッカーが言った。

「でも体の色が図鑑とは違う。図鑑だと砂漠色だったのに。」

「説明どうも。」

肩越しに言うとトリックスターはその肩にサイキッカーに組み立てさせたRPGというロケット砲を担ぎ、地面にしゃがんだ。

膝に線路の小石が刺さったが、地味な痛みを無視し、砲身に取り付けられた鉄製の標準越しにドラゴンをみた。

アンキロサウルスという名前は彼も聞いたことがあったが、はたしてかつて地球上に存在したその恐竜も、目の前のドラゴンと同等のサイズだったのだろうか。

体高はビルどころか、立体歩道よりもはるかに低い。

だが横に伸びた胴体と、そこから伸びた長い首と尻尾はこの都道と同等のサイズがある。

そして尻尾が振り回される度、先端についた鉄球のコブが都道を挟むビルの壁面を砕いていく。

崩れた瓦礫やガラスがドラゴンの胴体に落ちるが、ドラゴンの背中には岩山のような鱗が生えており、それらを抜け落ちた瓦礫が都道へと堆積してくのだった。

「なんであんな大物がここにいるんだろうな。」

「あのデカブツがへましたんだろ。」

背後から聞こえた間の抜けた台詞に、トリックスターは毒づいた。

狂ったように尻尾を振り回すドラゴンの姿から、見失った獲物を探しているのみえる。

おそらく誰かがあのドラゴンに目をつけられ、そして逃げているのだろうとトリックスターは推測した。

そしてその誰かが、あの三人である可能性が十分に高い。

そうでなければ、わざわざ地響きの音が届くのも遅い射程距離ギリギリのドラゴンを相手に攻撃しようなどとは思わない。

しばらく地響きを立て続けるとドラゴンは数回首を振り回し、そして何を思ったのか突如直立したのだった。

両前足が持ち上げ後ろ足だけで地面を踏んでいる。

背中 of 岩山にかぶっていた瓦礫が地上へ流れ、宙へ浮いた足からも粉塵が舞い上がっている。

その太い足を地面へ叩きつけるつもりだろうか。

地上にいる人間にならその光景を見上げ、恐怖に自失してしまうだろう。

だがそれを傍観できる距離と高度にいる一人からこぼれたのは笑みであった。

ここから見れば、鱗の無い腹ががら空きなのである。

「合わせるよ！」

「了解。」

引き金を引くと殴られたような衝撃が肩を襲い、火薬のにおいと爆音を残し、筒から弾頭が消えた。

池袋駅まであと少しというところで、三人は足止めを食らった。

池袋駅まで続く都道へと戻り、あとは道なりに一直線に歩くだけと安堵したその瞬間、地面が揺れた。

振り返ると今さっき歩いた道路が盛り上がり、岩山がコンクリートを突き破り地上に現れた。

後からわかったことだが地下から突き出たその岩山は、甲羅のような体表から生えたウロコ・ウロコとよべるレベルではないが、であった。

長い首と両前足を都道にのせ、地下に残った下半身が地上に上ると、ハンマーのついた長い尻尾もあらわとなる。

その姿を見上げるなりサムライが「まるでアンキロサウルスだね…」と呟き、感想が終わると同時に、二人は呆然とするハツカーをかかえ、駅へと全力で走りだした。

走りながらデストロイヤーは舌打ちをする、相手は動きが鈍そうだ

が、四肢と、長い首と胴体を持っており、一直線に走っても間合いから逃れられないと、彼は判断したのだ。

彼は足を遅らせサムライとハッカーの背中を見送ると、きびす返しドラゴンへと拳を構えた。

ドラゴンと比較すると、さすがの彼も小さなおもちゃのように見える。

「デスさん!？」

立ち止まるサムライ達に彼は「先に行け」と大声で叫んだ。

ドラゴンは長い首を鞭のように振り回し始め、対するデストロイヤーは身を屈めてそれをやり過ぎそうとする。

このドラゴンにとっては都道も狭いのだろう、尻尾を振り回したくとも方向転換ができないようだ。

今度は首を振り上げそれを地面に叩きつけた。

地面を蹴り、辛うじてそれを避けたデストロイヤーへ、すかさず首を振り回したドラゴンによる真横からの一撃が襲いかかる。

対する彼は両腕でそれを防御したが、ドラゴンの力に勝てるはずがなく、そのままの姿勢で吹っ飛ばされた。

体は宙に浮き、そのままドラゴンの首と同じ軌道を描く寸前で吹き飛び、どこかの店のショーウィンドウに叩きつけられる。

さすがの彼も今の一撃に意識はもつろつとし、瓦礫とガラスに埋まった体を動かすことはできなかった。

店の外では唸り声と小さな地響きがなり、半壊した壁から見上げると宙に浮いたドラゴンの両前足と背中 of 鎧に隠れていた腹が映った。

そのまま両足を店へ目がけて叩きつけるつもりだろう。

だが体は動かない。

そしてこの一撃をやり過ぎたとしても拳が届かない相手に成すべなど無いと、そのことは彼自身がよくわかっておりわかった上での行動だった。

こんなドラゴンを相手に勝つつもりなどなく最初から時間稼ぎのつもりだったのだ。

その時間稼ぎすらも十分に行えなかったかもしれないが、今のところドラゴンの注意は自分へと向いている。

後はサムライ達が理性を持って行動してくればいいと彼が祈ったその矢先、「デスさん」「デストロイヤー」と姿は見えなかったが二人の叫び声が聞こえた。

彼の祈りは届かなかったようだ。

早く逃げろと言ったではないかと内心不満を言いつつ、立ち上がるうとするが、やはり体は動かせなかった。

そういえばムラクモに所属して長いがこういう窮地は久しぶりだな

と、彼は思い出ししていた。

だが、生きたドラゴンの足が落ちることはなかった。

直立したドラゴンに一発のロケット弾が命中し、赤黒い爆煙がドラゴンの腹から首の付け根にかけて盛り上がったのだ。

デストロイヤーがロケット弾であるとわかるには少し時間がかかったが、サムライ達はそれが上空を走る音と、飛んできた先に池袋駅があると思えたため、爆炎の正体とそれを撃った人物がわかった。

その際にサムライ達がデストロイヤーの救助に向かう。

装甲の薄い部分への攻撃に後ろ足はグラつき、炎がドラゴンの首を包み込んでいる。

膨れ上がる赤黒い爆煙は収まることなくドラゴンの頭を指して上り始め、その光景はドラゴンの首が一本の火柱と化しているようにも見える

じきに頭部も炎に包まれようとしたその瞬間、炎が妙な動きをしていることにサムライ達は気付いた。

火柱化した炎の一部が、赤い輝きを増すと同時に垂直に膨れ上がり、火柱から吹き上げたのだ。

吹き上げた炎は放物線を描くように、噴出した点からさらに上へと着地し火柱と再び同化する。

まるでイルカが水面を飛び跳ねるような現象が火柱に起こり、その

数は徐々に増え始め、ノロノロとした煙の動きを通りこし、根元に集中していた炎が一気にドラゴンの頭部へとのぼり始める。

手をかりながら立ち上がったデストロイヤーが「サイキッカーの力だ」と言つと、三人は直立したままのドラゴンを尻目に店を出、池袋駅を目指し走り始めた。

やがて全ての炎が頭部へ集中し、ドラゴンの悲鳴が炎に飲み込まれかけた瞬間、もつとも走っている三人が見ることができなかつたが、爆発が起こつた。

その爆発と音はロケット弾が命中した時のものよりはるかに強力で大きかつた。

ドラゴンは背中からビルへと倒れ、その背中を受けたビルが息絶えたドラゴンを覆い隠すのだった。

山手線を二つの物体が全速力で走っている。

一つは錆びたトラック。

トラックにはバンパーの下半分に金属板が取り付けられている。

これは地面に転がる瓦礫を避けるためのものであり、線路上を走るために施した改造であった。

だが現在、その改造は意味を成さなかった。

池袋駅を出発したこのトラックは今再び池袋駅方面へと走っている。

つまり来た道に戻っているのだ。

しかし諸事情があったため方向転換する余裕が無く、このトラックは今、全速力かつバックで来た道を引き返している。

バンパー部分の金属板が意味を成さないのはそういう理由である。

機械としての性能限界なのか、はたまた修理品であるためなのか、トラックからは焦げ臭さが漂い、それが運転席にも届いていたが気にすることなく、トリックスターはアクセルを踏み続ける。

タイヤから火花がはじけ、荷台も激しく揺れ続け、立っているのがやっとの状態だが、止まることはできない、今停止すれば正面に迫

る怪物の餌食となるからだ。

線路を踏みしめ、後ろ向きで逃げるトラックを追いかけるのは、一体のドラゴンであった。

サムライ達が池袋駅へと戻り、トラックで駅を出発してから十五分が経過したころ、線路の先に一体のドラゴンがポツンと立っていたのだ。

トラックはそれに気づかず接触してしまい、交戦状態に入ってしまった。・・・というわけではなく、いかに東京の空が暗雲に包まれているとはいえ、線路上にドラゴンが立っていれば、離れても肉眼でその姿は確認できる。

運転していたトリックスターは冷静にアクセルを緩め後退しようとし、他の四人も口を閉じ、身を屈め、気配を消そうとした。

だが呆気なく気づかれた。

ドラゴンの赤い瞳がトラックを認識し、そして撃ってきたのだ。

トリックスターはドライブからバックへとシフトレバーを素早く入れ替え、アクセルを踏み込んだ。

初弾を避けそのままドラゴンとの距離をとろうとする、対してドラゴンは続けて数発撃ち、やがて離れたトラックを追いかけ始め、今にいたるのである。

「今日は厄日だ！」

トリックスターは左手でハンドルを握りつつ、拳銃を握った右手を窓から出して連射する。

しかしドラゴンの装甲には通用しない、それどころかはじき返されている。

四肢で走るその姿はデストロイヤー達が都道で遭遇したドラゴンと同じだが、その姿はまるで違う。

先程のドラゴンの姿が恐竜と例えるべきならば、今目の前にいるドラゴンは機械竜と表現すべき姿だろうか。

皮膚やウロコはほとんど存在せず、牙や爪も生えていない。

巨石を切り出して造ったような鎧をまとい、それらによって体表は覆い隠され、そして鎧には壁画のような文字が記されている。

両肩と背中も鎧で覆われているが、その隙間からは穴の開いた緑色の突起が生え、外部へとその先を向けている姿はまるで城壁の隙間から大砲を構えているようである。

時折、緑の砲台と文字の刻まれた鎧との間に、稲妻のような現象が起こり周囲の景色を歪めている。

「もし無事に都庁へ帰れたらムラクモに報告しよう。こんな奴見たことない。」

「鑑賞してないで運転代われ！」

サイキッカーにハンドルを握られ、トリックスターが激しく揺れる

窓から身を乗り出しての二丁連射を放つ。

狙いを全て左肩の砲台にし、少しでも敵の砲撃を遅らせるのが狙いだったが、効果が無いと彼も徐々に察していた。

弾が無くなると身体を引つ込め「逃げるトラックから敵を撃つとか、『ハウス・オブ・ザ・デッド』じゃねえつつの。」と呟きつつ、それらの銃をしまった。

一方の機械竜には怯む様子は一切見られず、砲撃を続けてきた。

砲撃は鉛弾ではなく、黒紫色に輝き、機械竜のまとう稲妻が表面にまとわりついた光の弾だった。

いったいどういう原理で発射されているのだろうか。

トリックスターは座席の下に置いてあった銀色のスーツケースを小窓から荷台へと投げ出した。

「このままじゃちがあかない、しかけるしかないぜデスちゃん！」

「誰がデスちゃんだこら」と言いつつ開けると、箱の中には三種類の手投げ弾が収納されていた。

「最初に『閃光弾』で距離をとって、それから『手榴弾』と最後に『ナパーム』で道を塞ごう！」

「了解、投げる時はできるだけ揺らすなよ！」

「それはコイツに言ってくれ！」

「この状況下で揺らすとか無理でしょ…。」

トリックスターが後ろを見ている間、助手席からサイキッカーが運転席へと身体をそらし、ハンドルを握っているのだった。

「トリさん、このトラックで逃げ切れそうかな？」

「はあ！なんだって！」

ドラゴンの砲撃と揺れる車体では。音がかき消され普通の声量では相手の耳には届かない。

「こ・の・ま・ま・逃げ切れるかな！？」

「わからない、エンジンに聞いてくれ！」

その言葉を受け、デストロイヤーが荷台から下に向かって「どうだエンジン大丈夫か！」と叫んだ。

「本当に聞くかよ！」

「ぷっ…！」

「あっ！ハーちゃんが笑った！」

「なんだ、俺がおかしなことを言ったか？」

笑ってない、笑ってない、と頭を振りつつ、頬をキープしつつもの冷静な表情を維持しようとするハッカーに「今、笑ったよね絶対？」

とサムライが追い打ちをかけると、再び表情が崩れるのだった。

「ほらあ、デスさんがボケるからあ！」

「ボケたわけじゃないのに…。」

「漫才やってないで、準備しろよ！」

「俺、この体勢で運転とかキツイんだけど…。」

と今度は砲撃ではなく、助手席から不満が飛んできた。

「キツイよこの体勢…。」

「もうしばらく我慢しろ！」

「今何時？」

「知るかあ！」

機械竜の砲撃が、トラック斜め前に横たわった電車へ命中し、線路の小石を巻き上げると同時に、砕け散った車体の破片が飛び上がった。

「だんだんあちらさんの命中率がよくなってきた。」

トリックスターが腰のホルスターから、回転式拳銃を取り出した。

回転式拳銃とは西部劇にでてくるような六発入りの銃だが、彼が持つ銃は錆びた鉄色ではなく銀色に輝いている。

弾倉へ専用の弾を一発ずつ装填し、それを終わると荷台の準備が整っているか確認した。

後ろからの了解を得ると「撃つたら投げろ」と伝え、機械竜からの砲撃が飛びぬけたと見ると、再び窓から身を乗り出した。

今度は二丁ではなく、両手で一丁の銃を構えている。

「こいつはただの弾じゃないぜ。」

銃を支える両手を前に突き出し、標準越しに機械竜の赤い瞳を片目で睨んだ。

トラックは相変わらず揺れるが、彼の上半身は岩のように硬直し、座席が弾んでも風圧を受けても微動しなかった。

親指で撃鉄を起こすと弾の入った部分が回転する。

「撃つぞ！」

引き金を包んだ人差し指にほんの少し力を加えると、撃鉄が振り下ろされ、回転弾倉に入った銃弾の背中を叩いた。

銀色の銃身を走り抜け、放たれた弾丸が迫り来る頭部へと突き刺さった。

「鉄板すら打ち抜く強化弾のお味はどうだい、ドラゴンさんよお！」

銃声を聞いたデストロイヤーは、慣性を打ち負かすかのごとく、荷

台の端から大きく踏み込み、機械竜めがけ閃光弾を投げた。

放物線を描き、トラックの正面から数メートル先に落下した金属の塊は、一瞬の白い光と耳鳴りを起こさせる破裂音を残して砕け散った。

射撃と閃光弾によって機械竜の速度が落ち、トラックとの間に距離が開き始める。

続いてデストロイヤーが手榴弾を投げると、僅かな炎と煙が立ち上り、速度を遅めた機械竜の足が完全に止まった。

「いいぞ！」

数メートルしかなかった機械竜との距離が、十、二十、と徐々に広がり始める。

そこへ最後の手投げ弾が投げられと、トラックの正面に炎の壁が立ち上り始めるのだった。

トリックスターは窓から体を戻し、銃をしまうと、サイキッカーに代わってハンドルを握った、助手席に座っていた彼は左手でハンドルを握り、右手でアクセルを押し続けていたらしい。

「腰が痛いよ、まったく。」

「ご苦労さん。このままバックで池袋駅まで戻ろう。」

と、安堵して荷台へと振り返った途端、金切り声のような音になり、

トラックが急停止した。

荷台に立っていた三人が後ろに投げ出されそうになるが、なんとかバランスを保つ一方、トリックスターがフロントガラスに頭を強打した。

見ると助手席から伸びたサイキッカーの足がブレーキの上に乗っている。

「何すんだ、ほつぺたの内側噛んじゃったろ！」

トリックスターが前を見るより早く、サイキッカーがシフトをドライブに変え、

伸ばした足をさらに伸ばし、アクセルを踏みこんだ。

「な、前に進んだら危ない！」

「奴は後ろだ！」

見ると炎の壁の向こうに立っているはずの機械竜の姿が消え、加速するトラックの後ろから地面を砕く落下音が響いた。

「嘘だろ！」

サイドミラーに尻尾が映り、方向転換した機械竜の赤い瞳がミラー越しにトリックスターを睨んだ。

機械竜は炎の壁を飛び越えここまでやって来たのだ。

「ハーちゃんは下がって！」

荷台ではサムライ達が迫りくる機械竜に武器を構えている。

二人の背中越しに機械竜を見つめていたハッカーは何かを思い出したかのように光の端末を開いた。

「運転を代わってくれ、道をあける。」

ハンドルをこなしたサイキッカーは、先程のトリックスターと同じように助手席の窓から身を乗り出した。

彼の正面に迫るのはナパーム弾から広がった炎の壁、高さはトラックの屋根とほぼ同じである。

ナパーム弾とはいえ、手投げ式でこれ程の炎が発生することはないだろう。

「私、トリックスターが作りました特性のナパームは、たった一個で高さ約三メートル、半径約四メートルの炎を長時間発生させることができます。怪物から逃げる際に使用すれば敵を足止めすることができます。さあて、気になるお値段はなんとお…。…なのに、俺の自信作をあんな簡単に飛び越えらるなんて…。」

「泣くなよ。この炎は無駄じゃない、再利用してやる。」

走行するトラックが炎にふれた瞬間、サイキッカーが手の平を炎にかざすと、トラックの幅に合わせ炎が真っ二つに割れ、トラックは垂直な炎の壁面を通過したのだった。

「おうスゲエ、まるでモーセの十戒だ。」

走り抜けると垂直に立った炎の壁は崩れ、元の形へと戻った…かに見えた。

サイキツカーは窓から炎へと振り返り、そこに向かって中指を突き立て上を指した。

崩れた炎が楕円形に無秩序に広がり始めたのも束の間、炎が竜巻のように回転を始め、凝縮された炎は火柱のように空を上っていた。

「すごいな、サイさん…。」

これがサイキツカーの能力、彼は自然界に生じたエネルギーを操作し、その力を増減させる力を持つ。

ロケット弾から生じた炎を凝縮し、それを武器にドラゴンに止めをさしたのも彼の力によるものだった。

立ち上る火柱を前に飛び越えることもできず機械竜の足が停止する。砲身をこちらにむけるが炎を隔てた機械竜との距離は数十メートルも離れており、これなら余裕でしのげるだろう。

「これなら奴も追ってこれはないだろう。」

「ハーちゃん？」

「さっすがサイキツカーと言いたいが、俺の特性ナパーム弾があつてこそ、あの炎の壁ができたことを忘れないように。」

「言ってる。」

「ねえ、ハーちゃん？」

安堵する四人とは対照的にハッカーは光の端末を広げ続けている。

機械竜の写真の映った画面が開かれ、ハッカーの小さな指が機械竜に関する資料を流していく。

サムライには流し読んでいるようにしか見えなかったが、ハッカーの頭の中にそれらの文章が刻まれていく。

ムラクモ専用のクラウドから全ての情報を集め、彼女は端末を閉じ、そして言った一言が「まずいわ。」であった。

ハッカーが機械竜を見上げると、彼女につられサムライも立ち往生する遙か先の機械竜を見た。

機械竜に動きはないが、背中から生えた砲台にバリバリと稲妻がまわりついている。

「みんなトラックを下りて！」

ハッカーが叫ぶと同時に、トラックの動きが鈍り始めた。

「どっつした？」

「前に進まない…！」

「磁力よ！アイツが引き付けているの！」

「磁力だと！」

「下りようデスさん！サイさんと、トリさんも！」

「磁力とはな、ここに来た時の計器の狂いもその仕業か…！」

「はい、はい、俺の名前は最後なんだねえ！」

荷台から三人が飛び降り、運転席からサイキッカーと、ブツブツと文句を呟きながらスーツケースと筒を背負いトリックスターが下りた。

五人が下りるとズルズルと後退していたトラックが急加速し火柱へと飲み込まれてしまった。

刀や銃といった金属類が暴れるのを抑え、五人はその場から避難しようとするが、磁力はさらに強まり、やがて地面に埋まっていた線路が瓦礫を持ち上げ、上から釣り糸で引っ張られているかのように浮き上がり始めた。

後ろからは磁力、前からは線路や瓦礫が飛来し、五人は障害物をさけるため身を屈め、なんとか磁力から離れようと線路を這っているが、その場に止まるのが精一杯であった。

「ウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

機械竜が雄叫びを上げた。

稲妻はさらに大きく機械竜の全身へと広がり、身体からは黄色い光

が放たれ、鎧に描かれた模様が輝いている。

やがて全身にまとわりついた稲妻は先端が針のようにとがった背中の砲台に凝縮されていくのだった。

「何をする気だ…！」

スーツケースと銀の銃を抑えつつ、トリックスターが機械竜を見上げた。

これまで撃ってきたのは全て両肩の砲台であり、背中からの砲撃は受けたことがなかった。

背中のは肩に比べ長く、そして巨大だった。

「放電する気よ！」とハッカーが叫び、「この距離で撃たれば命は無い」と四人に伝えた。

「逃げるか？」

「この状況で逃げるとか無理だろ、前からは瓦礫の嵐だぞ！」

「熱を使えば…。」

「ハッカー、何か名案があるのか？」

「トリックスター」とハッカーは初めて彼の名を呼び、「ロケット弾は撃てるか」と聞いた。

「ああ、俺の背中で『機械竜のところに行きた〜い』って暴れてい

るが、撃つことには問題ない。弾もこの中だ。」

と彼はスーツケースを踏んだ。

「ムラクモの情報によると、あの機械竜は背中の砲台を軸に磁力を発生させているらしいの。もしそれが正しければそこを破壊すれば、敵の攻撃も止められるかも。」

「なるほど、だが残弾は残り一発だけだ。その威力だけで破壊できるかは疑問だ。」

「万一破壊できなくても、爆発によって熱を与えれば磁力を狂わせることができるかもしれない。」

ハッカーの言葉に一同はハッと気づくのがだった。

「そうか、普通の磁石なら熱を与えれば磁力を失うからな。」

「普通の磁石なら、だけど…。」

「面白い。」

「トリさん？」

トリックスターは既にケースから弾頭を取り出し、筒の中に差し込んでいた。

そこへ再び、地の底から聞こえるような機械竜の雄叫びが響くと、機械竜の背中の砲身がゆっくりとコチラに向けられるのだった。

トリックスターはロケット砲を担ぎ、機械竜の背中への砲台へと狙いを定め、お互いの砲身が向かい合った。

「命中させるのは簡単さ。難しいのは撃つタイミングだ。」

背中の砲台を撃つ最良のタイミングは機械竜が下を向いた時、つまり頭部を下げた時であった。

四肢で体を支えている機械竜の背中を見た時、最も邪魔なのは頭部であり、それが下がる瞬間を作らなければならないのだ。

「援護しろ！」

サイキッカーは、トリックスターの腰に収納されていた銀色の銃をつかみ取り、機械竜の頭部を狙い撃った。

その五発の弾は衝突の瞬間、磁力によって加速され本来の数倍の威力を発揮していたのだ。

機械竜は己の身体を守るかのごとく身を縮め、そして頭を下げた。

今なら、撃てる。

「…発しー！」

「トリさん！」

「後ろ！」

援護のため前に出たサムライとサイキッカーが振り返った瞬間、二人は氷ついてしまった。

ロケット弾を構える彼の背後から、磁力に引き寄せられた岩のように巨大な瓦礫が迫っていたのだ。

「しまった！」

万事休すと思ったその時、迫る瓦礫とトリックスターの間に巨体が割り込み、その拳が瓦礫を砕ききった。

「デスさん！」

「前に気をとられすぎだ。」

「さっすが、デスちゃん。」

デストロイヤーが防壁となり、そしてハッカーが彼らの間に立った。

「早く撃つて！」

気づけば機械竜の頭が持ち上がり背中の中が隠れてしまっているのだった。

発射のタイミングを失ったかに見えたが、そこでサムライが立ち上がった。

「そんなにほしいなら、あげるよ！」

彼女は機械竜に向かって叫び、腰に差していた脇差しを抜刀すると、それを機械竜に向かって投げつけるのだった。

投げられた脇差しはクルクルと回転し、そして機械竜の頭部へと突き刺さるのだった。

弾と同様、磁力がその威力を数倍に跳ね上げ、そして投げられた脇差しが飛び交う瓦礫に衝突することなく、数十メートル先の機械竜の頭部へと見事命中したのは幸運といえた。

悲痛な雄叫びを上げる機械竜を捉え「撃て」と四人が叫んだ。

「そんなに期待されたら、ハードル上がったっちゃうだろ！」

筒から弾頭が消え、機械竜の背中に爆煙が広がった。

№8 エピソード(前書き)

原作『SEGA』

原案『セブンスドラゴン2020』

No8 エピローグ

「私がムラクモに所属した理由はね、スカウトされたこともあるけど、それ以上に『お花』を取り戻したかったから。」

「お花を取り戻す？」

その回答にハッカーは首をかしげ、サムライはそんな少女に自らの過去について少しずつ話始めるのだった。

両親が事故で亡くなり祖母に引き取られて育てられたこと。

祖母が自分の剣術師範だということ。

祖母は花が好きで、亡くなった祖父も花が好きだったということ。

祖母とよく花の名所に行ったということ。

そしてサムライの話は徐々にムラクモ所属への話へと変わっていく。

「その日、私とおばあちゃんがお花見に行ったの。」

その日と聞いただけで、ハッカーにはその日付がわかった。

「…その帰りにドラゴン達が現れて、私達はなんとか安全な場所に避難できたけど、おばあちゃんが、」すぐに戻るから、お前はここにいなさい。』って言い残してどこかに行っちゃったの。それが最後の言葉だった。」

「…ごめんなさい、嫌な事を思い出させてしまって。」

サムライは「いいの」と笑いながら首を振るが、その瞳からはどこかもの悲しさが伝わってくる。

「二日後に自衛隊の人がおばあちゃんを見つけてくれて、持っていた遺品を私に届けてくれたの。」

「遺品を？」

「古いアルバムだった。私が赤ちゃんの頃の写真や、私のお母さんの写真もあった。それから若い頃のおばあちゃんと亡くなったおじいちゃんとの新婚旅行とか結婚式の写真もあったからびっくりしたよ。きつとおばあちゃん、それを取り戻すために避難所を離れてお家に戻ったみたい。」

そしてその道中で命を落としたのだとサムライが言わずともわかり、そしてサムライが戦う理由は、肉親をドラゴンに奪われたことへ復讐だろうかとハッカーは思いそうになったが、それは自分の中で強く否定された。

なぜならサムライが最初に「花」という単語を言い上げたこともしかりだが、それ以上に、ハッカーにはサムライが復讐のために戦っているとは思えなかったためだ。

復讐心からドラゴンと戦う者を今まで見てきたが、サムライからはそんな印象は微塵も感じられなかったからだ。

「最初のページにはおじいちゃんとおばあちゃんのツーショット写真が一枚だけ入っていたの。日付が結婚式よりも半年も前だったからひよつとすると初デートの写真かもしれない。それでその写真の隣に一枚の花びらが挟まっていたの。」

再びサムライが言葉を切りそして「それを見て思い出したんだ。」と言った。

「おばあちゃんよく言っていたの。『花が嫌いな人に悪い人はいない、おじいちゃんもお花が大好きだった』って。」

「おじいさんも。」

「ひよつとするとね、もしもこの世界にお花がなかったら、おばあちゃんはおじいちゃんと結婚していなかったかもしれないし、もしそうだとしたらお母さんも私も生まれてなかったかもしれない。」

変な考え方かもしれないけど、お花のおかげで私は生きているのになって。

だからドラゴン達を追い払って東京を元通りにしたら、もう一度、綺麗なお花を咲かせたいなって。今の東京は『フロワロ』だらけだし、あんなお花ちつとも綺麗じゃないし……。」

と言うとサムライは路肩に生えている、けばけばしい花びらを咲かせるフロワロを苦笑いで見下ろすのだった。

多くの戦闘員がドラゴンに対何かしらの怒りや憎しみを抱いて戦う中、ドラゴンによって繁殖したフロワロを絶滅させ、本来の花を取り戻すために戦うとは、ずいぶん変わった理由である。

「…サムライは、ドラゴン達が憎くはないの？」

サムライの言葉を疑うわけではないが、その心中を確かめたかったためハツカーは再び問い、それにまたも苦笑いを浮かべつつ、サムライは答えるのだった。

「憎くないって言ったら嘘になる。だけど私が一人で避難所にいた時、見ず知らずの人がご飯を分けてくれたし、おばあちゃんの遺品も自衛隊の人が丁寧に届けてくれたし…、なんていうか、少し変だけど、憎しみより、嬉しいと思うことの方が多くて。」

見上げた目を見開き沈黙するハツカーに、サムライは恥ずかしそうに頭をかきつつ、「私が戦う理由は以上であります。」と右手をおでこにあてるのだった。

「…ごめんね、退屈だったかな？」

「そんなことはない。」

その言葉をハツカーは慌てて否定し、サムライはどこか安心したように、苦笑いではなく、微笑むのだった。

それから数歩進み、二人を待っていたデストロイヤーと合流し、三人は池袋サンシャインの中へ足を踏み入れるのだった。

「ねえ、今何時？」

「いいかげんに起きろ。」

「あそこでご飯食べようよお…。」

「ドラゴンが全滅するまで全店休業だ。」

新宿駅、『ODAKYU』という青い看板の建物に挟まれた立体歩道の上に三人は立っていた。

トリックスターが新宿駅地上のバスターミナルを見下ろし、その反対側でサイキッカーが赤字に黄色くMと書かれた看板を見下ろし、そして指差していた。

「休業中かよ。」とブツクサと文句を言うと、サイキッカーはきびす返し、黄色いスーツの隣に立ち、歩道の手すりに両手と顎をつけて地上を見下ろす、ハッカーはそんな二人の背中を見つめ、なぜかマツカザルとゾンビアーミー達を倒した直後のサムライとの会話を思い出していたのだった。

今やそれも遠い日の記憶であつが、ハツカーにはサムライ達と出会つた日が昨日の事のように心に残っていた。

『ハーちゃん』と自分にあだ名をつけたサムライと、見た目の割に優しく、そして繊細な心をもつたデストロイヤー。

最初は他の人間と同じように自分の姿を見るなり戸惑つたが、最終的には依頼を引き受けてくれ、そして最後まで自分を守ってくれた。

結果的に依頼の目的である救命は失敗に終わったが、それでも二人を責める気持など芽生えず、むしろ自分にムラクモとして戦う意味と生き様を教えてくれた二人には、感謝の気持ちと、尊敬の念しかなかった。

そして先輩とも言うべき二人の背中が、漠然としてはいるが彼女が目標とする姿となつているのかもしれない。

デストロイヤーもサムライも、単なる恨みや憎しみではなく、何か別の大きな感情に突き動かされ戦うことを選んだ。

綺麗事かもしれないがハツカーには二人の戦う理由なとてつもない魅力を感じ、

自分には志などないが、せめて二人の戦いを支えられないかと、依頼を達成し終えた瞬間から思っていたのだった。

だが二人と共に戦い過ごす日々というのは、今のところ彼女の妄想でしかなかった。

「ハツカー、始めるぞ。」

トリックスターの声に彼女は振り返って返事をし、準備を整えた。

「緊張しているか。」とサイキッカーの気づかいに返事をしつつ、ハッカーはスカートに差した脇差しを取り出すことなく握るのだった。

そうすることで彼ら二人だけでなく、サムライ達が側にいるような気がして、彼女は少しだけ心を落ち着かせ、勇気を持つことができたのだ。

だが五人で戦った唯一の記憶は機械竜との戦いだけ。

そして、その戦いの結末は、彼女にとって、そしてトリックスター達にもとって、喜ばしいものではないのだ、

ロケット弾を受けた機械竜はかすかな間動きを止めたものの、数秒後に狂ったように暴れ出し、両肩からの砲撃を乱射し、足元が崩れ落ちるまで線路上で暴走し続けたのだ。

砲撃が飛び交う中、サムライが真っ先に自分へ駆け付け抱き庇い、その前でデストロイヤーが盾となり、自分を守ってくれた。

それからしばらくして、付近にいたジーエータイ達が応援に駆け付けたが、彼らが到着した時には線路が崩れ、機械竜は遙か下の地上へと落ちていたのだ。

トリックスター、サイキッカー、そしてハッカーの三人は軽傷だったが、サムライとデストロイヤーにいたっては様態すら確認できなかった。

二人は機械竜と共に地上へ落ち、行方不明となった。

生きているのか、死んでいるのかもわからず、唯一見つかったのはサムライが持っていた脇差しだけであつた。

二週間が経つた今も、二人は発見されていない。

ハッカーは脇差しから手を放すとゆっくりと深呼吸をした。

サムライとデストロイヤーと共に戦えないことは残念だつた。

だが。

だが、こうして信頼できるパートナー達と組むことができてよかったと彼女は思っていた。

おバカに見えて意外にしつかり者のトリックスターと、単なる寝坊すけではないサイキッカー、二人とも実力があり、そして情に厚く、機械竜との戦いから今日まで自分の面倒を見てくれているのだ。

「何度も言うが、俺とサイキッカーが相手を挟撃する。ハッカーは後ろから援護を頼む。」

了解を確認するとトリックスターが立体歩道から下を見た。

青い鱗をまとい二本足で直立するドラゴンが地響きをたてている。

「手強そうだな。」と言いつつサイキッカーが懐からペットボトルを取り出した。

「ここで足止めできればいいが。」

「できなきゃ俺達の都庁ていじょうもおしまいだ。」

今度はトリックスターが懐から太く長いナイフを取り出し、歩道の手すりに足をかける。

事前に集めた情報によると目下の敵には通常火器と炎が通じないらしい。

青くゴツゴツした鱗が炎を防ぎ、両腕に発達したマンホールのように固い丸い鱗を盾に、急所に襲いかかる飛び道具を防いでいるのだ。

ドラゴンはその両腕を振り回し、道を塞ぐバリケードを破壊している。

このドラゴンを止めるため様々な部隊が編成されたが進撃を止めることはできず、なおも悠々と都庁へと向かっている。

そして今、三人による攻撃が始まるうとしているのだった。

ドラゴンが歩道の真下に来たことを目視すると、トリックスターが歩道から飛び降り、両手で振り上げたナイフをドラゴンの頭部へと突き刺した。

怒り狂うドラゴンの首に投げ出され、地上に着地すると、すかさず距離をとるべく走り出すのだった。

それを追撃するドラゴンの背後からサイキッカーが攻撃し、再び正面からトリックスターが銀の銃で攻撃するはずだった。

だが、サイキッカーは動かない。

歩道に足をかけた姿勢のまま、ハッカーへとゆっくり振り返り、そしてこう言うのだった。

「震えているよ。」

「…え？」

「初めて君を見たとき足も震えていた。その時俺は、君がそれを隠そうと虚勢を張っていたのかとも思ったよ。」

路上で寝起き、トリックスターにかつがれていた時から既に、サイキッカーは彼女自身すらも気付かなかった怯えの心に感じていたようだ。

「でも最近は何も震えていなかった。なのに、今は震えている。あのドラゴンが怖いかい？」

「…少し。」

ハッカーがぎこちなく笑って答えると、サイキッカーが鼻で笑った。

「『少し』…か、強いよ君は。俺は、かなり恐い。」

「え？」

「君は強い。人は目標や理想像ができると怯えの心がなくなるからな。君の目標はあの二人だろう。」

ハッカーは黙って、首を少しだけ曲げて、頷いた。

「…でも。」

あの二人はもういない。

機械竜との戦いから二週間が過ぎても発見されず、そして目撃情報も無い。

そして機械竜との戦いで、かなり体力を消耗していたのだ。

そうした事実から導かれる結論は…。

「大丈夫。」

ハツカーの頭が真っ暗なシナリオをえがききろうとした瞬間、サイキッカーがそれを否定し、フードと白髪に隠れているが、優しげな瞳が、暗くなりつつあったハツカーを見下ろしていた。

「大丈夫だよ。あの二人ならきつと生きている。なんてたつて強いからね。どんな状況下に陥っても、恐れずに立ち向かい、そして怯えたりなんかしないだろう。」

言い切るとサイキッカーはペットボトルをクルンと宙に軽く投げ、それをキャッチすると、彼女の緊張を解すかのように、笑って見せるのだった。

「さあてと、それじゃあそろそろ。」

「おおーい！高みの見物してないで早く援護しろお！」

見下ろすとせつせと走る黄色い小さな背中を、ドスンドスンと地響きをたてながらドラゴンが追いかけていた。

「- 行きますか。」

「ええ。」

死にものぐるいのトリックスターから、かなり遅れて、サイキッカーとハツカーが立体歩道から飛び降りた。

突進するドラゴンの背後にサイキッカーとハッカーが着地し、ペットボトルから宙に撒き散らした水が瞬時に氷の矢となりドラゴンの背中に深々と突き刺さった。

彼の背中を見守りつつ、後ろではハッカーは光の端末を開いた。

かすかな両足の震えは、消えていた。

No.8 エピソード(後書き)

第零章 完

To be continued on the game of
seven dragons 2020

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6840y/>

セブンスドラゴン2020

2012年1月2日09時45分発行